
Devil May Cry -Keep yourself alive-

スノーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil May Cry - Keep yourself
alive -

【Nコード】

N2261T

【作者名】

スノーマン

【あらすじ】

舞台は日本。

東京では、原因不明の濃霧が異常発生し始める。

そして濃霧の日に必ず起こる、連続猟奇殺人事件。

そんな中、1人の高校生《黒峰 響^{キョウ}》は運悪く濃霧に遭遇してしまい、運命の歯車は容赦なく彼を巻き込んでいく。

さあ始めよう。

Keep yourself alive（炎のロックンロール）

を
.....

Episode:1 Mist day【霧の日】（前書き）

こんにちは、もしくは初めまして、スノーマンです。

こんな厨二全開な作品ではありますが、どうか見てって下さいw

なお、この作品は『NIGHT HEAD【Devil May Cry Another story】』のリメイク版でもありません。

でも共通点が殆んど無いので、こちらを知らなくても全然大丈夫です（爆）

では、どうぞッ！

Episode:1 Mist day【霧の日】

——キーン、コーン、カーン、コーン……

太陽が西に沈みかけた夕空の下、学校独特のチャイムが鳴る。
とある高等学校にて、生徒達は本日の授業は修了し、真っ直ぐ家に
帰宅する者、部活動で汗を流す者、仲間と寄り道する者と、各々ア
フタースクールの時間を過ごしている。

その中で一人、校門の前で立ち尽くす男子生徒が……

「——やべ、ケータイ忘れた」

ポケットをまさぐり、男子生徒はため息を漏らす。ボサボサの茶
髪を風に揺らし、学ランを全開にあげてだらしなく着崩した男子生
徒は「ああ面倒くせえ……」とぼやきながら学校へと踵を返した。
いつもより長く感じる廊下を歩き、目当ての教室に入り、自分の
机の中から携帯電話を拾う。

再び帰路についた頃には、時刻はもう6時を回っていた。
再び校門の前まで出た男子生徒が、ぼつりと呟く。

「……また霧、か」

先ほど校門にいた時にはなかった、濃い霧が発生していたのだ。
別に霧が発生するのは珍しい事じゃない。

むしろ男子生徒は“霧が発生しすぎて”もう慣れてしまった、といった様子だ。ここ東京は最近、とある異常気象が頻発しているのだ。原因不明の濃霧、とニュースでいつも取り沙汰されている。

「とつとと帰るか。最近物騒だしな」

気だるそうに欠伸をかき、男子生徒は歩き始める。

別によく霧が出ようが、日常生活に支障はない。

だが“最近物騒”という言葉の通り、異常なのは霧だけではない。濃霧の異常発生と同時期に、“連続殺人事件”が多発しているのだ。

これもニュースでよく取り上げられている。

刃物で斬殺ならまだいい。時には人間の原型を留めていないくらいに、バラバラに潰されている例もあり、不気味な事件だ。

さらに気味の悪い事に、その連続殺人事件は、決まって霧が発生した時に起こるのだ。

そのせいか、霧が発生するや否や、住民は皆家に閉じ籠ってしまい、人の姿は疎らだ。

一人帰る男子生徒の足も、自然と早歩きになるのは必然だった。

「チツ……、近道使うか」

男子生徒は一瞬立ち止まったかと思うと、歩道脇の路地裏の中に入ってしまった。

閑散とした雰囲気嫌いがさし、一刻も早く我が家に着きたいのだ。この路地裏を通れば、いつも遠回りしなければならぬ住宅街を横

断できる。

路地裏の住民はドブネズミくらいだ。何ら不安はない。

こんな路地裏に都合よく連続殺人犯に出くわすなど、映画の中だけのクリシェだ。

男子生徒は、そう腹をくくっていた。

一種の迷路となっっている路地裏を、男子生徒は迷うことなく我が家への直通路を進んでいく。

——ジャリ……

「あ？」

突如何かを踏みつけた感触がして、男子生徒は足を止めた。
足元を見てみると、少量の砂を踏んだようだ。

（砂……？ 何で都会の、それも路地裏に？）

近くに公園があるわけでもない。

男子生徒は妙な砂に訝しむが、「どうでもいいか」の一言で片付け、再び歩を進める。

その時だった——

——ウオオオオ……

突然、声が聞こえた。

およそ人とは思えない、低く、寧猛な呻き声。

男子生徒は怪訝に眉をひそめる。

そう遠くない距離から聞こえた気がする。

無視してこのまま帰ることもできるが……どうも気になる。

(……行ってみつか)

好奇心に逆らえず、奇妙な声の聞こえた方向へ男子生徒は歩き始めた。

用心の為に足元を立てないように。

少し歩いていく内に、男子生徒はある事に気付いた。

空気が、変化しつつあることに。

この重くて鋭い独特の雰囲気——殺気。

男子生徒は確かに、殺気を感じ取ったのだ。

ただの一般的な高校生に過ぎない彼にも分かるほど、ビシビシと肌に突き刺さるように伝わってくる。

まるで“感じ取ってください”と言わんばかりに、遠慮なく殺気をぶち撒けてるとさえ思えた。

男子生徒の額を、一筋の冷や汗が伝う。

——ウオオオオ……！

声が近い。

目の前の曲がり角を曲がれば、奇妙な声の正体に辿り着けるだろう。
まさか、本当に連続殺人犯か？

そんな思いが男子生徒をよぎる。

（だったら、俺が化けの皮を剥がしてやるよ……！）

拳を固く握り締める。

男子生徒は覚悟を決めると、ゆっくりと、曲がり角を覗いた。
そこにいたのは――

「ッ!？」

思わず声が出そうになり、口に手を当ててなんとか堪えた。

それでも男子生徒は視線の先に映る“ソレ”から目を離さない。

――否、離せない。

（なん……だ、ありゃあ……!？）

背筋がゾツと凍りつく。まるで金縛りにあつたかのように、身体がピクリとも動かない。

“恐怖”が、身体の底から押し上げられていく。

「ウオオオオオ!!」

“ソレ”は吠えた。

全身に纏う黒いボロボロのローブを震わせて。

“ソレ”は吠えた。

赤い血で彩られた、身の丈もある大鎌を掲げて。

“ソレ”は吠えた。

肉も皮も無い、骨だけで構成された軀を震わせて。

もはや人間の煩慮から外れている、異形の何か。

その異形を一目見ただけで、どうしようもなく恐怖心を駆り立てる。

頭が勝手に連想させるのだ。

まるで死神のようだと。

まるで“悪魔”のようだと。

それだけではない。

その死神のような異形の足元に、赤い何かが転がっているのだ。

だが、それだけは直ぐに分かった。

何故なら——それは惨殺された人間の死体なのだから。

しかし、問題はこれだけで終わりではなかった。

（クツ……！？

何だ？ 頭が……ツ！！）

突如激しい頭痛に襲われ、男子生徒は頭を抑えた。何か引きずり出されるような、内から引き裂かれるような痛みに、悲鳴が漏れそつになる。

痛みに必死に堪える男子生徒だが、その痛みはまともに立てなくなる程であり、足を一瞬ふらつかせてしまった。

——ジャリ……

「ッ!？」

しまった、と思った時は遅かった。

ふらついたせいで、足元にあった砂を踏みつけてしまったのだ。

何でここにもあるんだよ、と心の中で悪態をつくが、男子生徒はハッと自分の犯した過ちに気付いた。

「オ…オ……?」

男子生徒に背を向ける体勢で立っていた異形は、ゆっくりと背後に振り返る。そして——男子生徒と目が合ってしまった。

「ウオオオオオ!」

気付かれた。

そう思った時には、男子生徒は異形の叫びを無視して走りだしていた。

早く逃げなければ。

さもなければ、殺される。

頭痛に苦しみながらも、とにかく表の通りに出る為に、路地裏を真っ直ぐ走る。

やがて出口が見えてきた。

さらに走るスピードを速める。

もうすぐ逃げ切れる、表に出れば安全だ。

そう思い男子生徒は駆け、路地裏から脱出を果たした。

——だが、その思惑は微塵に碎かれることとなる。

「なんだよ……これ……？」

男子生徒の前に広がる光景、それは——異形の群れだった。

先ほど見た異形に加え、ずだ袋に大きな刃を取った案山子カカシのような異形や、操り人形マリオネットのような異形。

それらが数えきれないほど多数、街を蹂躪しているのだ。

あらゆる公共物を破壊し、逃げ惑う人々を容赦なく殺し……

まるで“悪魔”のような所業が、目の前で繰り広げている。

「クソッ、またか……！！」

パニックに陥る暇もなく、忘れかけていた頭痛がぶり返し、男子生徒は膝をついてしまう。

まるで鈍器に殴られるように、脳の奥底から膨大な情報が記憶として、怒涛に押し寄せてくる感覚。

その情報の波から、男子生徒はなんとか一つの単語を拾い上げることができた。

「“悪魔”……？」

俺は、奴らを知ってんのか……？」

そう、まるで初めて見た気がしないのだ。

この記憶は何だ？

俺は知らない、なのに疑っていない自分がある。
ますます意味が分からない。

——ヒタ……ヒタ……

背後からの足音。

路地裏で遭遇した異形——否、悪魔が追いついてきたのだ。
おまけに、表で暴れている何体かの悪魔も男子生徒に気付き、
囲まれ始めている。

だが逃げようにも酷い頭痛のせいで、立つこともできない。
その間にも、悪魔の群れはじりじりと迫る。

（嘘だろ……殺される……）

死にたく……ない……）

朦朧とする意識の中で映し出される、死のビジョン。
早くこの場から逃げ出したい。

なのに身体が動かない。動けない。

このままでは……

——死にたくないか……ならばどうする？——

また声が聞こえた。

それも人間の——自分の声が、頭の中に直接語り掛けてくる。
これは幻聴なのか？
恐らくそうなのだろうが、そんな事を考えられるほどの余裕は残っていない。
構わず幻聴は続ける。

——正義のヒーローも来なければ、神の慈悲もここには届かない……。
このまま寝転がっていれば、“死”だ——

（死……嫌だ……。
死ぬのは嫌だ……）

——なら簡単なことだ。原因を取り除けばいい……——

原因を……取り除く？

——ドクン……

心臓が高鳴る。

同時に頭痛が嘘のように消え、血液が全身を駆け巡る。

——ドクン……

熱い。

火のように熱い血が、全身を刺激し、力が沸いてくる。

——ドクン……

そう、そうだ。

俺に死をもたらせる原因を——

——ドクン……！

——殺す！！

悪魔はもう目と鼻の先まで迫り、男子生徒に大鎌を振り降ろす！

——ガッ！

が、大鎌は突如立ち上がった男子生徒に受け止められた。それもなんと、たった二本の指で刃を挟んで。

男子生徒の表情は前髪に隠れてよく見えない。

しかし口だけは、まるで三日月のように笑みを浮かべた。ニィ……と、およそ快樂殺人者のような、危険な笑みを。

そして、彼は目覚める……

——ドオオオオ！！

大気を震わす轟音と共に、男子生徒の足元から巨大な灼熱の火柱が噴き上がった。

男子生徒は火柱に飲み込まれ、包囲していた悪魔は皆巻き込まれ、焼き尽くされた。

突如出現した火柱に、辺りを暴れ回っていた悪魔達も動きを止めた。

そのままごうごうと火柱は燃え盛っていたが、まるで風に流されるようにそれは一撃にかき消えた。

そして、そこには——

「ハア……ハア……！」

あの男子生徒が、立っていた。

息を切らしてはいるが、火柱に飲み込まれたというのに、身体も着ている学ランも“全くの無傷”で立っている。

「おい……」

群れる悪魔を、男子生徒は睨み付ける。

そしてそれらの悪魔に向かって、右手の中指を突き上げた。

「俺を殺してエんだろ？ 面倒クセエからまとめてかかってきな、腐れファッカー共。

この俺が——黒峰 響キヨウが相手してやるよ」

これが開戦の戦鐘ユングとなった。

悪魔達は各々の得物を振り上げ、男子生徒——キヨウに襲い掛かる。

「記憶とか悪魔とか、ンなもん今はどうでもいい——！」

ペツと地面に唾を吐き、両の拳を握り締める。

するとなんと、キヨウの拳に炎が発生し、拳を包み込んだのだ。魔力によって形成された、灼熱の炎の籠手ガントレット。

キヨウは悪魔共を駆逐するべく、正面から迎え撃つ。

「——今は、テメエらをブチ殺す——！！」

今ここに、1人の悪魔が産声を上げた。

その名は烈火の悪魔、黒峰キヨウ。

さあ、イカれたパーティーの始まりだ……！！

Episode:1 Mist day【霧の日】（後書き）

如何でしたか？

え？急展開すぎるって？

すいません、けっこうやつつけ仕事でして（汗）

キョウ君は“炎”をメインに戦います。

うーん、ベタだな（爆）

キョウ君のプロフィールは出す予定ですが、ストーリーの都合があるのでまたの機会に致します。

キョウの記憶とか、何で魔力使えるのかについては、次話辺りで明らかに出来たらいいなと思ってます。

まあ、問題はネロやダンテといった原作キャラとどう絡ませるかなんですが（汗）

それでは（＾＾）ノ

Episode:2}The wheel of fate is turning

我は寒、我は冬、我は雪……！（ ）

どうも、マコト使いからハクメン使いへ転向したスノーマンです。

今回、早速原作のキャラが登場しますズエア。
では、どうぞ！

濃霧が包み込む、閑静な住宅街。

普段は活気の溢れるこの街だが、今は異常な事態が起こっていた。電柱や看板、車など公共物はことごとく破壊され、火災が起きている家もある。

道には無惨に血を流す人間の死体、死体、死体……。住宅街は、荒廃したゴーストタウンに成り果てていた。そのゴーストタウンの一角で、動く影が……

それは、異形の群れ。

人間でも動物でもない、おぞましく禍々しい恐怖の権化。その姿は正しく、“悪魔”に相応しい。

もう一つの影は、一人の人影。

悪魔が殺到してきているにもかかわらず、対峙する形で立つ人影は恐れる様子を微塵も見せない。

やがて一匹の力カシのような悪魔——スケアクロウは人影に向かって飛び掛かり、足に付いた刃を振り降ろす——！

だが、人影——キョウは灼熱の炎を携えた拳を、飛び掛かるスケアクロウに向かって振り上げた。

「おらア——！」

——バキィッ——！！

炎の拳は刃を砕き、スケアクロウを空高く打ち上げた。

やがてアスファルトの地面に落ちると、破裂するように消滅する。

人間が、悪魔を一撃で殴り殺した。

その衝撃的な出来事を見た悪魔の群れは動きを止め、各々警戒するように身構える。

「ハッ、何ビビってんだよ。

ほら、お客さんが退屈してるぜ？」

キヨウは大きさに両手を広げて、余裕といった表情で挑発してみせる。

今の一撃で、キヨウは“完全に火がついた”。

奥底に眠る戦闘本能が静かに目を覚ます。

衝動の赴くままに暴れたいと、身体が疼く。

さあ、この喧嘩を楽しもうか……！

「来ねエのかよ、つまんねえ。

言っとくが、この俺に喧嘩売って——」

キヨウは右拳を引き絞るように構え、駆けた。

人間とは思えない速度で地面を滑るように悪魔の群れに急接近し、正面のヘルグリードを捉えた。

「——ただで帰れると思うなよ——」

——ドゴオ！！

勢いそのままに、顔面に右ストレートを叩き込んだ。

拳をもらったヘルグリードはレーザービームの如く吹き飛び、折れた電柱にぶつかって砂と化し消滅する。

「うおおおお！！」

そのまま悪魔の群れに飛び込み、文字通りキヨウは暴れ回る。

大鎌が振るわれようが、それごと叩き割りブツ飛ばす。

襲い来る悪魔をことごとく殴り、蹴り、投げ飛ばす。

烈火の拳が振るわれる度に、中空を紅蓮に染め上げる。

炎が拳の保護もしてくれているようで、いくら殴っても全然痛みを感じない。

「よつと！」

背後からマリオネットが刃を振りかぶる。

キヨウはそれを察知し、目の前のスケアクロウの手を掴む。

そして掴んだスケアクロウを、背後のマリオネットに叩き込んだ。

「ハハッ！　ハハハッ！！」

いつしか、キヨウは楽しげに笑いながら戦っていた。

一歩間違えれば死に繋がる、命のやり取り。

なのに恐怖はもう感じない。

むしろ心地よいスパイスだ。

ああ、最高の気分だ。

こんなスリル満点なアトラクション、他では味わえない——！

「ハハ、やべえ……！」

楽しすぎて狂っちまいそうだ——！」

悪魔の数も減ってきた。キヨウはスケアクロウを左手で掴み上げ、右手を固く握りしめる。

すると、右拳に炎が徐々に収束していく。

チリチリと焼ける音を立て、拳を包む炎は濃く、密度を増していく。

「Get down!!（くたばれ!!）」

——ガッ……！

そして、炎を収束させた右拳で掴んだスケアクロウを殴り上げた。

刹那——

——ドオオオオオン——！！

空を割るような轟音が響き、収束した炎が爆発したのだ。
ダイナマイトの如く強烈すぎる爆発にスケアクロウは塵も残さず消し飛んだ。

「クツ……！」

反動で身体が吹き飛びそうになるが、キョウは右腕を抑えて踏ん張ることで耐えた。

爆発した際に生じた火花が静かに舞い散り、そして地面に落ち消える。

いつの間にか、辺りの悪魔は残らず消えていた。

もう殺気は感じられず、増援の気配もない。

一息ついたキョウは、糸の切れた人形のように地面に座りこんだ。

途端にまるで見計らったかのように、霧空からポツポツと雨が降り始めた。

それがすぐにどしゃ降りの大雨となり、落ちる雨粒の音が騒がしい。だがキョウにとっては、この大雨が熱くなった頭を適度に冷やしてくれた。

「ククク……ハハハハ……」

俯いたまま、力なく乾いた笑いをこぼすキョウ。

端から見れば錯乱した狂人に見えるだろう。

いや、狂いたくもなる。

辺りを見渡せば、死屍累々とした人間のカーペット。電柱は折れ、

家も車も壊れ、アスファルトは抉られて……。

それらはおとぎ話に出てくるような、悪魔によって行われた。

まるで世界の終わりでも見ているかのようだった。

人が、人ではない化け物の群れに襲われていたのだから。

なす術なく、一方的に、女子供関係なく。

極めつけは、その悪魔に遭遇した際に起きた、自身の変化だ。

脳の奥から記憶を無理やり引きずり出される感覚。

その引きずり出された記憶から得た“悪魔”というワード。

そして——身体に宿った“炎”。

無意識の内に、自分は炎を操っていた。

無意識の内に、自分は恐怖を忘れていた。

無意識の内に、自分は戦いに酔いしれていた。

「……どうなっちまったんだ。俺の身体は……」

自分が自分じゃなくなるような感覚が、どうしようもなくキョウの恐怖を煽る。

人知を超えた力を以て、悪魔を倒す——そんな特撮ヒーロー染みた事をしたということを、未だ殴った感触が残る拳が事実だと訴えている。

感傷に浸っているからだろうか、ある一つの思いが頭をよぎった。

——俺はもう、元の生活に戻れないんじゃないか……？

「……考え過ぎ、だな」

即座に否定するように呟く。

不可思議な事が連続して起きたせいで、気が動転してしまっているのかもしれない。
とつとと帰ろう、そう思ってキヨウは立ち上がると、濃霧が立ち込める住宅街を後にした。

朝。

一人暮らししているアパートに帰宅したキヨウは、特に問題なく翌日を迎えた。

質素な一人部屋に据えられた電話が、目覚まし代わりに着信音をけたたましく響かせる。

朝っぱらから誰だよ……と唸りつつ、それに叩き起こされたキヨウは渋々とベッドから起き、受話器を取った。

電話の相手は、担任の教師からだった。

その内容はこうだ。

昨日の夕方、街の多くの一般人が惨殺された。

その時刻には例の濃霧が発生していたこともあり、警察は遂に非常事態宣言を発令。

それに伴って、学校側は生徒達に当分の間登校禁止の旨を伝えて回っているのだという。

適当に相づちを打って、受話器を戻すキヨウ。

そして再びベッドにドサリと倒れるように脱力する。

「はあ……」

陰鬱なため息を漏らす。登校禁止、なんて聞けばいつもなら驚喜乱舞する所だが、生憎今はそんな気分になれない。
昨日の異変が、まだ頭から離れないのだ。

悪魔、悪魔、悪魔……。
頭の中で繰り返し反芻させる。

（あんなバケモン、俺は見たことねえ……。
だったら、この既視感は何だ？）

あの悪魔共を、初めて見た気がしない。
キョウを悩ませている理由はこれにあった。
いくら思考を巡らせても、悪魔に関する情報が見い出せない。
だが、この強烈な既視感^{デジャヴ}が、自分は間違いなく悪魔を知っていることを裏付けている。

「……うだうだ考えても始まんねえか」

思案する事をやめ、キョウはベッドから身を起こす。

「とりあえず、昨日の場所に行ってみるか。
うんうん唸るよりかマシだろ」

そう言つて首を鳴らし、キヨウは外出の準備を始めた。

顔を洗い、朝食のトーストを頬張り、寝間着から服を着替える。
白い細身のスラックスを穿き、黒のシャツの上に赤いレザージャケットを羽織る。

最後に、右手の人差し指をピンと立て、指先に“炎”をイメージする。

「……よし」

見事指先にライターのように火が灯り、キヨウは満足したように頷く。

“炎”は問題なく運用できるようだ。

昨日いきなり発現した訳の分からない力だが、もしまた悪魔と交戦する事態が起きた場合、唯一の頼れる武器になる。

“炎”を消し、赤いブーツを履いてキヨウは外へ出た。

暫く歩き、昨日の場所に到着した時には、既に現場は警察と野次馬で溢れ返っていた。

10人を軽く越える大規模の殺人事件が起きたのだ。大勢の野次馬が集まるのは必然といえる。

中には被害者の親族なのか涙を流す人もいれば、「早く解決しろ」

「警察は何をやっている」といった罵声を初動捜査をしている警察に浴びせる人もいる。

遅々として解決の糸口の見えない事件に、住民のストレスは限界に達しつつあった。

キヨウは現場から少し離れた所から、その様子を複雑な思いで見ている。

あの時、自分がケータイを忘れずにもっと早く来ていれば、まだ状況は変わっていたかもしれない。

ならばいつそのこと、警察にその事を報告するか？

出来る訳がない。

犯人は悪魔です、なんて言った所で「馬鹿馬鹿しい」の一言で片付けられるだけだ。

事件の当事者なのに、何もすることが出来ない。

ただそれが歯がゆかった。

「——では、今回の事件についてどう思われますか？」

声のした方に振り返る。いつの間にか、ニュースの現場中継まで始まっていた。

キョウは、現在インタビューを受けている女性に目が留まった。

バツサリと切った黒髪にサングラスを掛け、胸元を大きく開けた白いスーツに、かなり丈の短いホットパンツを穿いた妙齡の女性だ。妖艶、という言葉がよく似合う、およそこの場には似つかわしくない雰囲気を出している。

というか、明らかに周囲から浮いている。

（胸元開けすぎだろ。普通に揺れてるし）

なんて感想を抱きつつも、目を逸らさない辺りキョウも中々なものである。

そして黒髪の女性はインタビューに応えた。

「——そうね、同じ人間が起こした事件とは思えないくらい凄絶なものね。」

“悪魔”の仕業です、なんて言われた方が納得しちゃうくらいに、ね」

……なに？

キヨウは言葉を失った。

“悪魔”、この単語をまさか第三者が口にするとは思ってもみなかった。

それに、その回りくどい応答が、まるで悪魔を知っているかのような口振りだと感じたのだ。

問いつめるか。そう思った時は遅かった。

インタビューを終え、黒髪の女性は既に現場から姿を消してしまっていた。

「チツ……！」

自身の記憶の手掛かりになるかもしれない人物を取り逃がしたことに、キヨウは吐き捨てるように舌打ちした。

また合った時にでも聞くか、と気持ちを切り換えると、キヨウもまた現場を後にした。

黒髪の女性が微笑む。

悪戯を思いついた子供のように、不敵に唇をつり上げて。

「久しぶりに大きな仕事^{ヤマ}になりそうね。

“アイツ” も呼んでおこうかしら……」

Episode: 2 } The wheel of fate is turning:

黒髪に白いスーツ……もう誰だかバレバレですね（笑）

勘の鋭い方は、彼女の言った“アイツ”も分かるでしょう。

彼女が仕事を押し付ける相手は“彼”しかいませんしね（爆）

最後に、お気軽に感想、ご意見お寄せ下さい！

それでは……

——我が名はスノーマン！推して参る！！

ズエアアアアア！！！！

リア友

「おまwなんでオールバックで来てんだよww
スノーマン

「寝グセだよコンチキショー」

リア友

「そうなの？ 普通に似合ってるぜ」

スノーマン

「（・|・）エッ・・・？」

ども、スノーマンです。

今朝、学校でこんなやり取りがありましたw
おいおい、俺にバージルになれと？（爆）

まあそんな話は置いて……

今回、またまた新キャラが登場します。

旧作をご存知の方なら知っているでしょう、あの子です。

それと、今回初めて挿し絵をしました。

成功してるかどうか不安です……

もし挿し絵ではなく、妙な文字数字の羅列を発見した場合、どうか
感想にてご指摘お願いします。

では、どうぞ！

Episode:3 Boy meet girl【少女との出会い】

澄みきった青の空、雲一つない春空に輝く太陽は我が物顔で光を降り注ぎ、快い世界を創りだす。

時刻は昼、キヨウは事件現場の次は図書館に立ち寄っていた。

都市部という事もあり造りは大きく、様々なカテゴリの書物が一通り揃っている。落ち着いて情報収集するには最適な場所だ。

そして今、キヨウはたくさん設けられた机の一つに座り、ある一つの本に目を通していた。

タイトルは《魔剣士譚》。古本のコーナーの隅にひっそりと一冊だけ在った本だ。

他にも悪魔に関する書物はあるにはあったが、どれも宗教的な事柄が絡み、元々そうだったものに興味が無いキヨウはうんざりして、開いては戻しての繰り返しだった。

だが、この《魔剣士譚》は違う。

宗教的な事柄は一切なく、たった一人の悪魔が魔界に反旗を翻し人間界を救った、という内容だった。

悪魔が、同じ悪魔を殺す。そこにキヨウは初めて興味を抱いた。

「スパード……魔帝ムンドウス……」。

どうやら、当たりを引いたみてえだな。

頭がチリチリ痛みやがる」

奥底に眠る記憶を刺激される感覚にキヨウはほくそ笑む。

自身の記憶の手掛かりがこんな身近にあったとは、予想外を通り越して皮肉に思えた。

踊る心に精一杯のブレーキをかけつつ、更にページをめくってい

く。

守り手、霸王アルゴサクスなどスパイダのその後の戦いについて書かれていたが、しかしどれもいたずらに記憶を刺激するだけで思い出すまでは至らなかった。

（……ま、本見ただけで思い出せる程軽い記憶だとは思っちゃいねえよ）

観念したように嘆息して、キヨウは本を閉じる。
所詮図書館に入るレベルの本だから仕方ないが、いかんせん内容が薄すぎる。例えるなら、グリム童話を子供用に簡略化したようなものだ。

文末に記された、世界で唯一スパイダを祀っているという《城塞都市フォルトゥナ》なら、もっと詳しい事が分かるかもしれない。
だが生憎、キヨウには外国に行く金も手段もない。

さて、どうしたものか……と座ったまま背伸びをする。何気なく窓に顔を向けると、空はいつの間にか夕焼け色に染まっていた。
同時にキヨウは驚愕する。何故なら、外が“霞んで”いるのだ。

「ハッ、昨日の今日でまたこれかよ……！」

外に、霧が発生していたのだ。

昨日もちょうど今のような夕刻に霧が起きた。つまり、今回も悪魔が来るかもしれない。

キヨウは本を片付ける事も忘れて図書館の出口に向かって歩き出

す。

「やっぱ俺には、こっちが向いてるな……！」

歩きながらも不敵な笑みを浮かべ、胸の前で右拳を開いた左手に打ち付ける。感じるのだ、ザラザラとした不快感が。それが魔力であり、悪魔が現れる前兆だとキヨウは確信していた。

悪魔を知るには、直接悪魔に接触していくしかない。そう決心し、図書館の自動ドアをくぐる。目の前に不気味に静かで湿った空間が広がる。

見通しの悪い霧の中を、キヨウは歩き始める。

「……妙だな」

誰に聞かせるわけでもなく呟く。この霧が出てから、街の雰囲気ガラリと変わっているのだ。

昼間はまだ人はそれなりにいたのだが、霧が出た途端に人の姿はおろか気配も消え、一瞬で昨日のようなゴーストタウンが出来上がっているのだ。件の霧が出ているとはいえ、都会の夕方に人が一人もいないというのは異常だ。仕事帰りのサラリーマンの一人や二人いそうなものなのだが。

キヨウは改めて、この霧は通常のそれと違うものだとは再認識した。

それから10分ほど歩き回ったが、悪魔らしきものには一向に出逢わない。闇雲に探しても駄目かと思つたキヨウは一旦立ち止まり、目を瞑り身体の五感に神経を集中させる。

「……向こうか」

すると意外とあっさり特定できた。といっても詳しい場所までは分からず、どの方角により濃い魔力があるか、という事しか分からなかったがキヨウにはそれだけで十分だった。

最初からやればよかったとため息を吐きつつ、魔力の感じた方角へ歩き――

「そうだ」

――出そうとして、やめた。その方角を直線的に行こうものなら、住宅街を横切らなければならない。加えてキヨウ記憶の手掛かりが得られない事で、少々ストレスが溜まっている。

一言で言えば、“ウズウズしている”のだ。

「どうせ誰もいないのなら……！」

言うが否や、突如キヨウは両足に力を込め跳躍した。それも一軒家を軽く見下ろせる程、空高く舞い上がる。

そのままキヨウは自由落下に身を任せ、一つの一軒家の屋根に着地した。

「ヒュー」こいつアすげえ」

予想外に高く跳べた事にキヨウは驚きを隠せない。やはり昨日の“あの時”から、身体能力も普通の人間のそれとは大きくかけ離れてしまったらしい。

俺はもう普通の人間じゃない。しかし、この悪魔のような力が無ければ、同じ悪魔と対等に戦えない。

そう思うと、やはり「皮肉なモンだな」という感想しか出てこなかった。もう悪魔と関わってしまった事実は覆らない。ならばいつまでもウジウジ悩んでないで行動すべきだ、という事もキヨウは分かっていた。

「さて、飛ばしていきますか！」

その後もキヨウは跳躍に跳躍を繰り返し、家の屋根を転々として突き進む。

——ダァン！

「ッ！？」

が、突如大きな音が響きキヨウは足を止めた。

「今のは、銃声……だよな？」

そう、無機質な銃声が聞こえたのだ。法治国家の日本では聞き慣れない音だが、この独特の音はそれ以外に形容しようがない。

それにこの銃声の大きさ、恐らく今いる場所から近い距離で発砲されたようだ。

「俺の他に悪魔と闘り合ってる奴がいるって事か……？」

まさか、昼間の……」

この銃声について思案するキヨウには、一人心当たりがあった。

昼間の白いスーツを着た女性。

あの女性は悪魔を知っているような口振りだった上に、妖艶ながらも威厳に満ちた印象を受けた。一言で言えば、ただ者ではない。余裕の笑みを浮かべて悪魔共を蜂の巣にする姿が、何故だか容易に想像できてしまう。

キヨウはさらに高い家の屋根、そして低いビルの屋上へと移動する。

「お、見つけた」

思い通り。

ビルという見通しの良い高台から見渡すと、濃霧のせいでぼんやりとだが、確かに銃の発砲光が瞬いた。
マズルフラッシュ

「それじゃ、飛び入り参加といきますか！」

パーティー会場は近い。

自然と気分も高揚し、空を駆けるように足も加速する。

瞬く間にキヨウはたどり着き、戦場となっている道路から最寄りの家の屋根に着地すると、戦いの状況を覗き込んだ。

4車線もある広い道路に、際限なく悪魔が湧き出てきている。その中に一人だけ、悪魔に抵抗する人間の姿があった。

「あれは……昼間の女じゃねえな」

キョトンと意外そうにキヨウは呟く。あの黒髪の女性が戦っていると決めつけていたが、実際は全くの別人だったのだ。

確かに女性ではある。だが黒髪ではなく、肩に触る程度の長さの金髪なのだ。服装も白いスーツではなく、白と青を基調としたロングコートを着ている。

何より、その出で立ちにはまだあどけなさが残っていて、推定でまだ10代の——キヨウとさほど離れていない年齢の少女だというのが驚いた。

そしてその少女が使う武器も、キヨウの興味を大きくそそる。

少女は両手に一挺ずつの拳銃を用いて戦う、所謂「二挺拳銃^{トゥーハンド}」というスタイルで戦いを展開している。使用している銃は《モーゼル・ミリタリー》。ドイツ製の旧式の拳銃だ。

この拳銃の最大の特徴は、トリガーの前にマガジンハウジングが設けられた点にある。これにより射撃競技銃のように正確な射撃が実現出来る。

そして“フルムハンドル 箒の柄”とあだ名された独特の形状をもつグリップは、掌が小さくても持ちやすいという利点があり、小柄な少女でも問題なく扱えるのだ。

今では骨董品に近い代物だけに非常にピーキーな性能だが、使いこなせば現代銃にも引けはとらない。

金髪の少女は二挺のモーゼル・ミリタリーを用いて、悪魔の群れを近づかせずに蹴散らしていく。だが、上から状況を見下ろしているキョウには分かっていた。

悪魔が、次第に勢いを押し返しつつあるのだ。悪魔の数は徐々に増えていく。少女もジリジリと後退していくが、この辺りの地形を知るキョウはその先に行き止まりがある事を知っている。

金髪の少女が数の波に飲み込まれるのは、時間の問題だった。

「さすがにヤバいつて感じだな。
しゃあねエ、そろそろ行くか」

指と首の骨を鳴らし、勢い良く屋根から跳躍する。いよいよキョウは戦場に飛び込んだ——！
キリングフィールド

「——くう……！ ダメ、このままじゃ……！」

金髪の少女の額に、冷たい汗が流れる。

状況が芳しくない。倒せども倒せども悪魔の数は増え続け、勢いを増していく。

多勢に無勢。自分一人だけでは、この数には対処し切れない。

ここは逃げるべきか……？

少女が撤退を選ぼうとした、その時だった――

「―― M a y I h e l p y o u ? (助けは必要か?)」

「え……？」

頭上から、声が聞こえてきた。

それもつかの間、悪魔の群れの先頭の、大鎌を持った赤い悪魔――

――ヘルⅡラストが――

――グシャア――！！

――上空からの乱入者に踏み潰された。

「ッ!?　だ、誰ですか!?!」

突然の乱入者に驚き、少女は両手のモーゼル・ミリタリーの銃口を乱入者の背中に向けた。

だが乱入者の男はそれを意に介さず、踏み潰したヘル・プライドを蹴り飛ばす。

そのまま振り返らずに、同じく乱入者に怖じ気づく悪魔の群れに向き直ると、漸く赤いレザージャケットの男——キョウは応えた。

「……俺か？」

そうだな、敢えて言うなら——」

両拳を握りしめ、燃え盛る炎を纏わせ——

「昼は学生、夜はなんとやら……ってヤツだ!!」

——悪魔の群れへ、真っ向から突撃をかけた。

それが引き金となり、悪魔の群れもおぞましい雄叫びを上げて、津波の如くキョウに押し寄せる。

そして、被我の距離が零に近づき、悪魔に接触する瞬間……

「よっ!!」

前方へ跳躍し、先頭集団を飛び越えた。そのまま空中で一回転しつつ下降し……

「おおらア！！」

——ドゴォ！！

群れの中央に穴をあけるように、両手に刃を備えた黒い大きな悪魔——メガ・スケアクロウの頭上に右拳を叩き込んだ。

アスファルトにクレーターが出来上がる程の轟撃にメガ・スケアクロウは消し飛び、同時に衝撃波が空気を押しだし、周囲の悪魔も吹き飛んだ。

「なッ……！！？」

その光景に、金髪の少女は言葉を失った。

いきなり現れた茶髪の男は、拳に炎を灯すという種も仕掛けもない芸当をした上に、一撃で悪魔の群れに風穴をブチ空けたのだ。荒唐無稽にも程がある。

「金髪のお嬢さん！ アンタ、名前は？」

「え！？ わ、私ですか！？」

クレーターの中心に立つ男の質問に、これまた驚いてすっとんきような声を上げる少女。

多数の悪魔に囲まれているにも拘わらず呑気に聞いてくるキョウ

に戸惑いつつも、答えない訳にもいかず、一つ咳払いをして応じた。

「……フィーネ。

《フィーネ・ブラツカイマー》です」

「オーケイ、フィーネ。

俺は黒峰 キョウ——」

その時、悠長に応じるキョウの背後で、ヘルⅡグラトニーが得物の鉄球を振り上げ——

——バキィ！

——るが、振り返りもせずにキョウが放った裏拳に吹き飛ばされた。

「——気軽にキョウって呼んでくれ」

不敵に口を吊り上げ、漸くキョウは自身を囲む悪魔の群れに意識を移した。

キョウとフィーネ。

少年と少女はここに、数奇な出会いを果たした。
運命の齒車は今、回り始める……

新キャラはオリキャラのフィーネちゃんでした。

彼女も旧作から引き継いでの登場です。

ただ、旧作の彼女とは大幅に変わりました。

まず武器。

二挺の《モーゼル・ミリタリー》を使います。

何故こんな古い銃を？そりゃ勿論、自分の趣味だからです（爆）

そしてルックス。

同じ金髪でも、肩に触る程度の短さになりました。

服装も、白と青を基調としたコート——と言っても分かりにくい
ですよ（汗）

フィーネの服は『エンド・オブ・エタニティ』のヒロイン《リ
ンベル》を参考にしたんです。

誰か分かる人いるかな……（^ー^;）

とりあえず、キョウとフィーネのプロフィールは次話の後書きにて
させていただきます。

フィーネの武器は、何も“モーゼルだけじゃない”ですからね。

次話はキョウとフィーネ、初めての共同作業です（誤字にあらす）

特にフィーネ、『ブレイブルー』を知る方は思わずニヤリとしてし
まうでしょう。

それでは（^o^）／

……まさか小説版デビルメイクライを執筆された《森橋ビンゴ》氏
が、『ギルティギア』や『ブレイブルー』のストーリー開発に協力

していたとは知らなかった。

どおりで神ゲーな訳だ、この二作品は。

これも、巡り合わせてやつですかね（汗）

Episode:4 Lightning【電光悪魔】（前書き）

「そうか……！ 二話を同時に投稿するんじゃなく、二つを結合すればいいのか……！」（。□。；）

ども、スノーマンです。

上記の通り、今回は二話分を一話に凝縮しました。

まあポリュームが増えたといっても、ほんのちよつとですけど（汗）
ケータイで執筆すると色々面倒ですねw

Episode:4 Lightning【電光悪魔】

「さアて、楽しいパーティーと洒落こみますか!」

——オ”オ”オ”オ”オ!!!

キョウの言葉に呼応するかのように、彼を包囲する悪魔は一斉に雄叫びを上げ、踊り掛かる。

最初に大鎌を持った赤い死神のような悪魔——ヘルラストが自慢の俊足を武器に、地を滑るように正面からキョウに肉薄する。

「余裕」

瞬く間に眼前に迫り、ヘルラストは下段から大鎌を振り上げる。だが振り上げられる瞬間、キョウは左足で大鎌の柄を軽く踏みつけ、相手の動きを封じた。

「ふっ!」

そして空いている右足で荒っぽく蹴り飛ばし、後続の悪魔に激突して消滅する。

「もうちょいビシッと来いよ、おら!」

今度はキヨウが前に踊り出て、眼前のスケアクロウを炎の右拳で殴り飛ばす。さらにキヨウから斜め前のマリオネットの首を掴み……

「ブツ飛べ！」

360 カバーするように振り回し、周りのスケアクロウを薙ぎ払う。力を込めすぎたせいか、得物代わりとしたマリオネットもバラバラに消滅した。

そんな中、文字通り暴れ回るキヨウの姿に、金髪の少女——フイーネは啞然とその光景を見つめていた。

「すごい……。あんなにたくさんの悪魔を簡単に……」

武器も持たず、己が身一つで悪魔を蹴散らす青年。^{キヨウ}

野獣のように荒々しく、防御や回避を省みない強引な攻めは、次々と悪魔を一撃必殺で粉砕していく。そのスタイルは、戦闘に慣れているというより、喧嘩慣れしていると言った方が適切だろう。

加えて、キヨウの拳を包むあの炎。赤いジャケットの袖口が全く焦げない辺り、自然界に存在する炎とは異質のものなのは明らかだ。

常人離れた怪力と、拳に灯る謎の炎。

この二つの事象を鑑みて、フイーネはある一つの仮説を立てた。

「まさか、人間じゃない……？」

あり得ない話ではない。人間の姿をした、あるいは擬態する悪魔もいるのだ。それが悪魔の中でも高位な存在なら、尋常ならざる身体能力を持っているものだ。

では、なぜ彼は同胞である悪魔と対峙する？

だが、フィーネの思考は突如終わりを告げた。

「ッ!？」

突如、自身の目と鼻の先に“砂”が現れた。

否——それは白い汚れたローブを纏った長身の悪魔《ヘルース
ロース》

砂を媒介とし、フィーネの眼前へと瞬間移動したのだ。それも現れた時には既に得物の大鎌を振りかぶっている。

だが、フィーネの行動も早かった。

今からモーゼルを構えても間に合わない。そう判断したフィーネは、廻し蹴りをするように腰を捻る。

——瞬間、フィーネのブーツの踵部から小さなブレードが顔を覗かせた。

「やあッ！」

そのままフィーネは廻し蹴りの遠心力をフルに生かし、刃の出た

仕込みブーツで器用にヘル〃スロースの顎を蹴り上げた。

予想外のカウンターを受けて、無防備な態勢でヘル〃スロースはたたらを踏む。

すかさずその隙を狙いフィーネは相手の懐に潜り込み、同時に両手のモーゼルを腰のガンベルトに収め、代わりにガンベルトに付いた鞘のようなケースからある物を取り出した。

> i 2 5 6 5 4 — 3 3 0 3 <

それはバタフライナイフ。片刃のブレードをもつ折り畳み式のナイフを、両手に一つずつ取り出したのだ。接近戦なら銃よりナイフの方が早い。

そして右手に持ったバタフライナイフを、指で器用に回転させながら――

「切り裂けッ！」

無防備なヘル〃スロースの腹部を滑らせた。

回転させたことで一振りで三度の斬撃を見舞い、ヘル〃スロースは苦し気に悶えた後に消滅する。

「やあああッ！！」

銃だけで応戦しては、いい的にされる。

そう判断したフィーネは、休む事なく悪魔の群れへと特攻を掛ける。行く手を阻む悪魔を素早いナイフ捌きで切り捨てながら、真っ直ぐキヨウの下に向かう。

四方八方に入り乱れる乱戦となった以上、キヨウの近くで共闘する方がリスクは少ない。得体の知らない彼に警戒を禁じ得ないが、彼ほどの実力なら背中を預けられる。

キヨウがスケアクロウを右足のネリチャギを浴びせ、フィーネがヘルラストを真っ二つに切り裂き、やがて二人は互いに背中合わせの態勢で構えを取った。

悪魔から目を離さずに、最初にフィーネが言葉を切り出す。

「まだあなたを信用した訳じゃありません。
ですが、状況が状況ですから」

「そうかい。」

「ま、俺は好きにやらせてもらっぜ」

語気を強めて威圧するようなフィーネの言葉に、キヨウはさも興味無さげに返す。

その傍若無人とも言える態度にフィーネは眉間に皺を刻みつつも、淡々と言葉を述べる。

「……せいぜい足を引つ張らないで下さいね」

「オーケイオーケイ。」

「そうカリカリすんなよ、美人が台無しだぜ？」

「なあ！！？ か、からかわないで下さいッ！！」

おちよくるようなキョウの返事に、つい素が出て顔を真っ赤に染めるフィーネ。

悪魔の存在も忘れて背後のキョウに振り返る。

果たして、キョウは笑っていた。

ニタリと、してやったりと言わんばかりの意地の悪い笑みを、一切の後ろめたさもなくフィーネにぶつけて。

やられた、フィーネは苦々しく痛感する。

同時に怒りも込み上げてきたが、その時既にキョウは逃げるように悪魔と交戦を再開した。

「ああ、もう！！」

フィーネもやむなく戦闘を再開する。

半ば自棄になってバタフライナイフを振るうが、その拳動には一切の無駄がない。

見えない線でもなぞるかのように繊細に、目にも留まらぬ速さで次々と悪魔をスライスしていく。

悪魔も得物の大鎌や処刑刀で襲い掛かるが、その全てをフィーネはバタフライナイフを滑らせ受け流し、時折仕込みブーツのカウンターで牽制する。

舞踏でも踏んでいるかのように悪魔を斬り刻んでいく姿は、正しく“蝶のように舞い、蜂のように刺す”という言葉体を現している。

「ハッ！ ちと弱すぎんじゃねえのか？」

フィーネを“柔”と例えるなら、対象的に、キヨウは“剛”の文字を愚直に追及したスタイルだ。

基本的に面倒くさがりな性格故に、ほぼ全ての攻撃が一撃必殺に特化している。

拳を振るえば炎の熱風が巻き起こり、吹き飛ばされた悪魔は多数を同胞を巻き込む弾丸と化す。

この男に攻撃を加えようものなら、野性に近い闘争本能にいち早く察知され、得物ごとその身を碎かれる。

キヨウにとっては下級悪魔との戦闘など、ただの路上喧嘩に等しい。
ストリートファイト

故に、喧嘩慣れしているキヨウが遅れを取る道理がない。

（チツ……！ とんだイタチごっこだ。

どれだけブツ飛ばしても、一向に数が減らねえ）

ヘルⅡスロースを蹴り飛ばし、キヨウは路上駐車されたワゴン車の上に飛び乗ると、戦場全体を見渡した。

（仲間を呼び寄せてる奴がいるとすれば……）

果たして、その予想は的中した。

群れのほぼ最後列に、得物の棺を振り回して同胞を召喚してる悪魔《ヘルⅡグリード》を捉えたのだ。

その数、五体。そしてそのヘルⅡグリードを守護するように多数の悪魔が壁となっている。

あの一角を掃討しない限り、延々と悪魔は湧き出てくるだろう。

そして、キヨウはこうも考えた。

素手でも十分いけるが、やはり何かしら即席の武器が欲しい。

それもヘルグリードを取り囲む壁を一気に崩せるような、攻撃範囲と耐久性を兼ね備えたヘヴィなものを。

だが希しくも、それらの条件を満たす武器は、直ぐに見つける事が出来た。

ニヤリと、キヨウは勝利を確信したように唇を三日月に歪ませた。

「フィーネ！ 俺はコイツらの大元を叩く！

しばらく踏ん張ってろ！」

キヨウの判断は早かった。

フィーネの返事も聞かずワゴン車から大きく跳躍し、スケアクロウを踏みつけつつ着地する。

そして目の前にある、つい先程見つけた“武器”を無造作に掴み取った。

キヨウが即席の武器として選んだもの、それは——バス停だった。

「でいやー！」

すかさずキヨウは背後に群がる多数の悪魔を、手にしたバス停で薙ぎ払う。

グシャリと鈍い音をたて、重く頑丈な底岩の一閃は、断末魔を上げる間もなく悪魔共を一撃で粉々に粉碎した。

「意外と使えるな、これ」

威力、範囲、剛性ともに申し分ない。

期待通りの性能に思わず笑みが溢れる。

そしてバス停を左手の逆手に持ち直し、準備は完了だ。
目標、群れの最後列、ヘルグリード。

「始めるか——」

バス停を後ろに構え、体勢を野獣のように低くし——

「飛ばすぜ……!!」

弾けるように、悪魔の海原へ飛び込んだ。

その勢いは、まさに弾丸の如く。

悪魔の海を、キョウは怒濤の猛攻で貫いていく。

交通の道標である筈のバス停は、今や巨大な鉄塊となり、容赦なく悪魔を噛み砕く。

絶え間無く爆発に似た轟音が空を震撼させる度に、悪魔は吹き飛び、または碎かれる。

破竹の勢いで突き進むキョウを下級悪魔が止められる訳もなく、

間もなく最後列のヘルⅡグリードの下に到達した。

「まず一つ!」

更に勢いを加速させ、目の前のヘルⅡグリードに向けてキョウはバス停を大きく頭上に振り被る。

それを咄嗟に反応したヘルⅡグリードは棺を盾代わりに前に出す。

——だが、ヘルⅡグリードは最後まで気付けなかった。

生半可な防御など、無駄な足掻きでしかない事を……

「Rock it!!」

掛け声を交え、キョウは振り上げたバス停を構わず振り降ろした。

——ドガアアア!!!!

猛烈な破砕音が響き、振り降ろした鉄塊は棺を木っ端微に破壊し、ヘルⅡグリードを叩き潰した。

同胞が一瞬でやられ、敵の存在に漸く気付いた他のヘルⅡグリードが、召喚の儀を中断し各々臨戦態勢を執る。

——が、もう遅い。

「続けて二つ!」

右手側のヘルⅡグリードに、振り向き様にバス停を振るう。
ヘルⅡグリードの手から離れた棺が中空を舞い、直撃を受けた本体は歩道のガードパイプに叩きつけられた。

「三つ！ 取っときな！」

勢いに乗ったキヨウは、息つく暇も与えない。

重力に身をまかせ落下する棺をキヨウは右手で掴み取り、左手側のヘルⅡグリードへとブン投げた。

距離も近い上にミサイルの如く放たれた棺に反応出来る訳もなく、吸い込まれるように顔面に直撃し、ヘルⅡグリードもろとも砂と化する。

そしてキヨウは四つめに取り掛かる。

だが既に残り二体のヘルⅡグリードは攻撃圏内まで接近しており、棺を大きく大上段に振り上げ、キヨウを叩き潰そうとしていた。

もはや回避は不可能。

低くおぞましい怒号を上げ、容赦なく二つの棺が振り降ろされる

！

——ガッ……！

「！？」

だが、ヘルⅡグリードの表情は驚愕で満たされた。

「……やる気あんのか？」

呆れに似た呟きが、静かにヘルⅡグリードの耳を打つ。

渾身の力を込めて振り降ろした棺。それをキヨウは何の苦もなくそれぞれ片手で受け止めたのだ。

回避は不可能だった？

端から避ける気など無い。

否——ザコの軽すぎる攻撃など、避けるまでもない。

これはマズイ。

一刻も早くキヨウから離れようと、ヘルⅡグリードは掴まれている棺を引き剥がさんと抵抗する。

だが、微動だにしない。どれだけ力を入れようとも。

不意に、一体のヘルⅡグリードに疑念が走った。

——何故、両手で棺を抑えられている？

——先ほどまで手にしていた鉄塊（バス停）は、どこへ消えた？

「あばよ……」

棺を掴まえたまま、キヨウは両手に炎を点火する。

瞬く間にキヨウの炎は棺を侵食し、ヘルⅡグリード自身に引火した。堪らず二体のヘルⅡグリードは棺を手放し、身を焼く炎に苦しみ悶える。

グリル焼きとなった棺をキヨウは無造作に投げ捨て、空に掲げるように右手を上げる。

その上げた右手に吸い寄せられるように、“空からバス停が落ちてきて”キャッチする。

——空からだと？

身を焦がされながらも、その瞬間を垣間見たヘルグリードは、しかし先の疑問に納得のいく答えが得られた。

——まさか、棺を振り降ろす一瞬の内に上空へ投げていたというのか……！？

ゆっくりとした動作で、バス停を持った右腕を後ろへ引き絞る。拳の炎がバス停へと引火し、ゆらりと陽炎を形作る。

「仲良く死んどけ……！」

そして渾身の力を込め、バス停を振り抜いた。炎を纏った鉄塊はヘルグリードを二体纏めて捉え、爆音と共に高層ビルのコンクリート壁へ叩きこんだ。

「一丁あがり、と」

全力で振るったせいでバス停がひしゃげてしまった。使い物にならなくなった鉄塊を放り投げると、キヨウはまだ残る悪魔の群れを一瞥する。

睨まれた悪魔は例外なく体をビクリと震わせ、獲物を構えつつも徐々に後退していく。

悪魔共は、今漸く認識したのだ。

自分達が噛みついたのは犬の尻尾ではなく、虎の尻尾だったという事を。

自分達は狩る側ではなく、最初から狩られる側にいた事を。

「さてと、ゴミ掃除を再開しますか」

軽く首を捻り骨を鳴らす。

キョウの凶悪な双眸が、獰猛に光った。

程なくして、悪魔の群れは一匹残らず全滅した。

ヘルグリード無き下級悪魔など、所詮は烏合の衆。二人に掛ければ、殲滅は時間だった。

「ふう……終わった終わった」

言葉の割りに疲れた様子はなく、キョウは歩道のガードパイプにもたれ掛かる。

——ジャキ……

だが、どうやらキヨウにはまだ安息は許されないらしい。

キヨウの眉間に、フィーネのモーゼルが零距离で突き付けられた。

「あなたは、何者ですか？」

毅然とした口調で問い掛けるフィーネ。

やれやれといった様子でキヨウは両手を頭の後ろで組み、答えた。

「だから言っただろ？ 昼は学生、夜は――」

「ふざけないで下さいッ！」

フィーネの激昂がキヨウの返答を遮り、さらに強く銃口を押し付けた。

流石に銃口のキスを受けては気分が滅入るものがある。

キヨウは面倒くさ気にモーゼルを掴み取り、無理やり銃口を顔から逸らした。

驚いたフィーネは掴まれたモーゼルを引っ込めようと抵抗するが、少女の華奢な腕ではキヨウには敵わない。

そして謎かけでもするように、キヨウは空いている手の人差し指をピンと立てた。

「それともう一つ。」

——霧、なんで晴れねえんだ？」

「ッ！？　そういえば……！」

言われてフィーネは周囲を見渡す。

やはりか、といった様子でキヨウは掴んでいたモーゼルを離れた。

そう、悪魔を全滅させた筈なのに、霧が晴れないのだ。

キヨウが悪魔とファーストコンタクトした際には、悪魔を消せば霧は晴れた。

モーゼルを二挺手に取って警戒するフィーネを見る辺り、予想通り“悪魔を全滅させれば霧は消える”が通例らしい。

つまり、未だ霧が晴れないという事は……

「まだ、悪魔は来る……？」

「みたいだな、これが」

警戒するフィーネとは対照的に、気だるそうにガードパイプにもたれるキヨウ。

増援の気配は一向に感じれず、不気味な沈黙が支配する。

——だが、それは唐突に訪れた。

——バチッ……

「ん……？」

キヨウは怪訝な表情で、明後日の方角へ顔を向ける。

「どうしました？」

「今、なんかバチッて……」

お前は聞こえなかったのか？」

「いえ、私は何も……」

首を傾げるフィーネ。その反応にキヨウは同じく首を傾げる。

空耳かと思ったが、直ぐにその考えを振り払う。

軽い、静電気のような音だった。

意識しなければ聞き落としてしまう程小さな音だったが、妙にはつきり聞こえた音が聞き間違いの筈が――

――バチッ……バチッ……！

「「ッ!？」」

突如、二人の周囲――否、所狭しと霧の空間を“雷光”が走った。

「来やがったな」

待ってましたと言わんばかりに好戦的な笑みを浮かべ、キョウはガードパイプから飛び降りる。

やはり先程の音は聞き間違いではなかった。

空間を三次元に走り回る雷光は、次第に勢いを強めていく。

そして一際大きな雷光がアスファルトにぶつかり、“それ”は姿を現した。

トカゲを連想させるその軀は、しかし二メートル近くはあるだろう巨軀は、しっかりと人間のように二足で君臨している。

長い舌を気味悪く震わせ、牙を並ばせた口はあるが目と認識できる部位は見当たらず、両手には三ツ又の槍のように三本の大きな爪が鈍く光る。

その悪魔の名は――

「あれは……“ブリッツ”！？
気をつけて、強敵です！」

「だろうな。掃き溜めのゴミにしちゃ、ガッツありそうだ」

フィーネがモーゼルを構え、キョウが拳を打ち鳴らす。

ブリッツと呼ばれた悪魔は両腕を交差させ、全身に電流が蓄積していく。

そして――

「ギシャアアアア！……！！」

——バチイン！！

咆哮。

同時に周囲の電柱に雷が墜ち、鼓膜を引き裂くような爆音が轟く。

「面白え……ッ！」

怯むどころか、キョウは三日月に口を吊り上げた。

また、この感覚。

恐怖以上に、闘争心が全身を駆け巡る。

ゾクゾクと背筋を刺激する背徳感が、麻薬のように魅力的で、堪らなくエキサイティングな気分にくれる。

「It's game time……！（ゲームの始まりだ……！）」

さあ、俺を楽しませてくれよ……？

Episode:4〜Lightning【電光悪魔】〜（後書き）

Character profile

黒峰 キヨウ

・ Height 183cm

・ Hair ボサボサとした茶髪

・ Eye 赤

・ Age 18歳

・ Weapon 炎の籠手

主人公。

一般的な高校生だったが、悪魔に遭遇した事を切っ掛けに、自身に眠っていた悪魔の力と記憶の断片が目覚める。

サバサバとした皮肉屋で戦闘狂の節があるが、面倒くさがり屋な一面もある。
バトルマニア

その為か攻撃方法は一撃必殺にこだわり、力押しの突撃戦法を好む。

何故悪魔についての記憶があるのか、その一切は謎に包まれている。

炎の魔力を発現する所を鑑みるに、炎系統の悪魔と関係している事は間違いなさそうだが……？

とまあ、とりあえずキヨウのプロフィールだけ書きました。
フィーネはもう少し々お待ち下さい。

いや〜それにしても、キヨウの荒ぶりようが半端ないですw

当初はもう少しクールな設定だったんですが、どうしてこうなった
（笑）

自分としては、フィーネの戦闘をもう少し強調したかったんですが、まだまだ精進が足りませぬ（汗）

フィーネの武器である、バタフライナイフと仕込みブーツ。『プレイブルー』を知る人はもう分かっているでしょうが、武装面は某諜報部の大尉さんを意識しています。

ヘルススロースに牙衝脚やつちやいましたし（爆）

さて、今回はブリッツ戦から始まります。

このビリビリ君が相手となると、DMCユーザーならもうお気付きでしょう。

——キョウ達、かなり不利なんですよね（黒笑）

いい加減、一方的な戦いには飽きちゃって（爆）

ですので、自分の未熟な文章でどこまでやれるか分かりませんが、手に汗握るような戦闘になるでしょう。

それでは（^o^）ノ

P.S.

ラムダのPSRが100から上がれない……（汗）

くそっ、みんな強すぎる（<—

Gallery

フィーネ

「こんにちは、フィーネ・ブラツカイマーです！

このコーナーは『Devil May Cry - Keep yourself alive-』のギャラリー……所謂設定資料集のようなものです」

キヨウ

「ストーリーが進むにつれ、またはアホ作者の気分次第で随時更新されていきまーす。

……あ？そんな暇あるなら小説書け？

全くもって同意だな。スノーマンの野郎、ロクに描けもしねえクセにはりきりやがって……マジめんどくせエ……」

フィーネ

「まあ暇な時にでもチラッと見てって下さい（＾ー＾；）では、どうぞッ！」

†黒峰 キヨウ

・似顔絵（笑）

> i 2 6 4 6 1 — 3 3 0 3 <

†フィーネ・ブラツカイマー

・武器

> i 2 5 6 5 4 — 3 3 0 3 <

3 3 0 3 3 3 | 3 5 6 5 2 1 . v

ヒッハー！

甘党だけどコーヒーはブラック派、スノーマンです！

さて、ブリッツ戦に入るワケですが……

——このブリッツ強すぎね？——

と思うかもしれませんが、どうか目を瞑って下さい（<―>）
どうでもいいですが、このサブタイの元ネタ誰かわかるかな？
では、どうぞッ！

Episode:5 Ride the lightning【電撃戦】

「It's game time……! (ゲームの始まりだ……!)

」

——バチッ!

一瞬。コンマ1秒に満たない僅かな刹那、ブリッツの姿が忽然と消え失せた。

否、消えたのではない。視認出来ない速さ、それこそ稲妻の如く超高速の域で、キョウ達の周囲を駆けているのだ。

「ブリッツはこの速さを駆使して、死角から襲って来ます。

攻撃を回避した後に反撃するのが有効です!」

「チッ、めんどくせエ奴だな……」

フィーネの助言に毒づくキョウ。

キョウにとつては、煩わしい待ちの戦法など“面倒くさい”の一言に尽きる。何より、性に合わない。

その間にもブリッツは二人の周りを不規則に疾駆し、機を伺っている。

雷電が走る度にあすファルトは削れ、車や看板など障害物がいても簡単に弾け飛ぶ。

まさに暴風の如く、ブリッツは霧むせぶ空間を掻き乱す。もし自身の体に当たればと思うと、焦燥を禁じ得ない。

キヨウは炎を発現せず自然体に、フィーネは愛銃のモーゼルを構え、静かにブリッツが牙を剥くその時を待つ。

「それと、ブリッツに初めから接近戦を挑むのは――」

フィーネの助言が続くその最中、永遠に続くかのようなバチバチと電流の弾ける音が――ほんの一瞬、何の前触れもなく途絶えた。

「ッ！？ 危ねえッ！！」

「キャッ！？」

弾けるように、キヨウはフィーネを突き飛ばした。突然の行動に驚くフィーネは、そのまま地面に尻餅をついてしまう。

瞬間、先程までフィーネが立っていた空間に、重く低い風切り音と共に何かが高速で通過した。

「出やがったな」

通過したソレはブリッツだ。

低く跳躍しフィーネを狙って突き出された右腕の爪は空を切り、重量級な体躯が嘘のように身軽に着地する。

「おらア！」

ブリッツが着地した今この時が、確かな隙であり、攻撃のチャンス。すかさずキヨウは一足で大胆に間合いを詰め、低く跳躍し右足に遠心力を乗せた飛び回し蹴り——所謂、ローリングソバットをブリッツの背中に叩き込んだ。

——バディツ——！！

「がッ……！？」

だが返ってきたのは肉を蹴る手応えではなく、鋭い電撃。

一瞬の内に鋭利な激痛がキヨウの全身を駆け抜け、悲鳴にならない悲鳴を上げる。

ブリッツの纏う電流が小さく爆ぜ、キヨウは弾き飛ばされると背中からアスファルトに落とされた。

「ダメですキヨウさん！」

近接攻撃はブリッツの纏う電流に阻まれます！」

素早く体勢を直しモーゼルを発砲するフィーネ。

図体の大きなブリッツ相手に外す訳もなく、未だ振り返らないブリッツの背中に弾丸がことごとく命中していく。しかし電流の壁に阻まれ、必然的に威力は半減してしまう。

その為ブリッツにとっては蛸に刺された程度のものなのか、全く怯む様子を見せない。

「そういう事は早く言うモンだぜ、ベイビー……」

毒づきながら、キョウは背中を丸めて、反動を使った勢いで立ち上がる。

ピリピリと身体が僅かに痺れを訴えるが、再び意識をブリッツへ向ける事でそれを無視する。

目の前では、弾丸のシャワーを浴びながらも平然としていたブリッツが、ゆっくりと緩慢な動作で振り返ってきた。

「直に殴れねえんなら——」

そう言うと、キョウは右拳に炎を灯す。
そしてブリッツが完全に此方に振り返るタイミングに合わせ——

「炎は耐え^{こた}えられるか……！？」

——ブリッツの顔面に右ストレートを放った。

——バディイイイ——

「クツ……!!」

だがやはり、電流の防壁に遮られてしまう。

それでも、先ほど攻撃した時とは明らかに違う点が、一つだけあった。

（電撃が来ない？ 俺の炎が奴の電流を遮断してんのか？）

そう。ブリッツに接触しても、電流が自分の身体に流れて来ないのだ。

キョウが精製する炎は魔力で形成されたもの。同じくブリッツの電流も魔力で精製されている為、二つの質の異なる魔力が互いに反発しあうのだ。

結果としてキョウとブリッツは、鏖競り合いのようにせめぎあう状態となる。

電流の防壁を破らんと、キョウは更に右拳に力を込める。ブリッツも負けじと足腰で踏ん張るが、ジリジリと後方へ吸い込まれるように押し込まれていく。

力は俺が上だ。このまま一気にブチ破る——！

——バチッ！

だが、後少し。

後少しで電流の防壁が破れる所で、ブリッツは再び超高速移動を開始し、強引にキョウから離脱されてしまった。

右拳はそのまま空振りして、キヨウは無様に前のめりによるけるが、直ぐに足にブレーキをかけて体勢を直す。

「力押しじゃあ自慢の足で逃げられる、か」

キヨウは誰に言うでもなく呟く。

ブリッツは再び二人の周囲の空間を駆け回っている。

唯一ブリッツに有効な武器“銃”を持っているフィーネだが、音速と相違ない速度で動き回る相手に狙いがつけられる訳がない。彼女に出来る事といえば、即座に回避行動に移れるように、その為だけに全神経をブリッツツへ向ける事ぐらいだ。

「ブリッツは銃撃でダメージを蓄積させて、電流を解除させるしかありません！」

キヨウさん、ここは耐えて下さい！」

「チツ、我慢くらべってワケか……」

思わず舌打ちが漏れる。理屈では理解しても、後手に回らざるを得ない状況に、キヨウは焦燥を禁じ得ない。

一方で、先程から妙にブリッツの事について詳しいなと疑問に思ったが、直ぐにその思考を消し去った。

ブリッツがいつ仕掛けて来るか分からない。余計な事を考えるのは後回しだ。

稲妻が止まることなく迸る。

二人は最大限に周囲を警戒し、静かに、ブリッツが仕掛けてくる瞬間を待つ。

ブリッツの巨大な爪の直撃を受けたら、まず命は無い。

その恐怖が、空気を刃のように張り詰める。

ほんの一秒間が、数分、あるいは数時間に感じる錯覚に囚われる。焦るな。とにかく耐えろ。

今はフィーネを信じて、攻撃のチャンスが訪れる時を待つしかない……！

——やがて、ブリッツは再び姿を現した。

「ッ！？」

現れた場所は、キョウの目の前。それこそ目と鼻の先、僅かでも動けば額と額が接触しそうな程の距離に。

まさかいきなり零に近い距離に現れるとは思わず、キョウは一瞬反応が遅れてしまう。

間髪いれず、ブリッツは右腕を水平に払う。

回避は間に合わない。だが頭より身体が反応したようで、キョウは炎を纏ったままの拳で咄嗟に防御姿勢をとった。

——ガキインッ！

「クッ……！？」

電爪と炎拳がぶつかり合い、金属音に似た音を立て、静電気と火

花が飛び散り舞う。

身体が弾き飛ばされそうになるが何とか堪えて、キヨウは反撃せんと拳を構えるが、既にブリッツは離脱し、軀を稲妻と化して再び周囲を飛び交っていた。

（奴の攻撃を防げたとしても、たちまち逃げられちまうか。
ギリ貧だぜ、こいつは……）

ブリッツの身に纏う電流もさることながら、攻撃方法も極めて電撃的だ。そのあまりにも徹底したヒットアンドアウェイぶりに、キヨウは心の中で毒づく。

だが熱くなろうとも、キヨウは決して冷静な視点を見失わない。
ここで焦ってしまったら、ブリッツの翻弄戦術という“檻”から抜け出せなくなってしまうと、キヨウは心得ていた。

キヨウは考える。

ブリッツが攻撃をし、再び軀を稲妻に転じて駆けるまでの時間差は、およそ1秒ほどしかない。タイムラグ

つまりこの一瞬の短時間で銃弾を撃ち込むしかない。

しかし、頼みの綱の銃も威力面では決定打には程遠い。電流の防壁に威力を落とされてしまう上に、この図体だ。先に掃除した下級悪魔よりは遥かにタフだろう。事実、銃弾を浴びても露とも感じていない風だった。

状況は限りなくリスクと言える。

炎を伴った攻撃も通じない。フィーネのバタフライナイフ等もつての他だ。

銃も期待出来るほど効果はなく、更に言えば弾数は限りがある。

決して好きなだけ無限に撃てる訳ではない。

このままでは、ブリッツになぶり殺しにされるだろう。
せめて一瞬でもいいから、ブリッツの動きを完全に止められて、
弱点に銃を至近距離で撃つことが出来れば、まだ可能性はあるのだ
ろうが……。

ここまで考えて、キヨウは不敵に唇を歪めた。

「……ハッ、そうだよ。」

俺には炎があるじゃねえか」

「……？ キヨウさん？」

「——フィーネ、“プランB”だ」

「え……？」

勝手に話を進められて困惑するフィーネを尻目に、キヨウはおも
むろに目を閉じる。

（イメージしろ……。

炎をもっと強く、大きく、濃密に重ねる……！）

魔力の管制など今まで考えたことも無かったが、いざ実行しよう
としたら自然と身体が動く。まるで昔からそうしているように、身
体に馴染む。

そんな自分の身体に不気味がっている暇はない。

炎を強化するイメージを頭の中に描いた瞬間、当然のように身体の奥から魔力が溢れ、当然のように魔力がスムーズに身体を循環し、瞬く間に両手に魔力が収束する。

「そらよ……ッ！」

途端に猛々しい発火音が耳を打ち、両拳の炎は腕全体を包み込むほど肥大化した。

その際に発生した熱波により炎から無数の火花が舞い上がり、粉雪のようにたゆたいながらも、熱く輝く火花は濃霧を蒸発させ、キョウを照らし出していた。

「……綺麗……」

不意に、フィーネはそんな言葉を洩らしていた。

まるで星空のようだ、というのがフィーネの素直な感想だった。

散りばめられた無数の火花は闇夜を照らす星であり、その中心で佇むキョウはまさしく、太陽のように神々しく輝いていた。

その魔性の輝きにフィーネは魅せられ、惹き付けられずにはいられなかった。

そして、その輝きに魅せられた者はフィーネだけではない。

「……!？」

ブリッツも異常を感知し、二人から少し離れた地点で動きを止めていた。

ブリッツには目という器官が無い。当然、その視力は皆無と云っていい。

だがキョウの爆発的な魔力の発生が、ブリッツの無いに等しい知性に驚愕をもたらした。

「出たぜ、飛んで火に入る夏の虫が」

不敵な微笑を顔に貼り付けたまま、キョウはブリッツに向き直る。今まで、ただ待っていては此方がやられる状況だった。

——ならば話は簡単、ブリッツを此方から文字通り“炙り出せば”いいのだ。

強化した炎に反応するかどうかは分の悪い賭けだったが、視力の代わりに発達したブリッツの“四感”にはよい刺激となつたらしい。

ブリッツが驚いている隙に、キョウは一気に距離を詰めるべく走り出す。ブリッツも迫るキョウに気付くと、右腕を振りかざし襲い掛かる。

キョウは真つ向からブリッツとの正面衝突コースを突き進む。

一瞬の内に互いの距離は零となり、ブリッツの電爪がキョウの眼前に迫る——！

「捕った……！」

——ガッ……！

だが、ブリッツの一撃はキヨウへ届くことは無かった。

ブリッツの右腕の電爪を、キヨウは左手で掴み取ったのだ。

キヨウの炎がブリッツの電流を遮断してくれるが、鋭い爪を掴んでいる為、掌から赤い血が流れ出る。だがキヨウはその手を離さない。ブリッツが必死に引き抜こうと抵抗するが、パワーではキヨウに劣るブリッツでは微動だにしない。

業を煮やしたブリッツは、空いている左腕の電爪をキヨウの脇腹に向かって突き出した。

「見えてんだよ」

まるで予想出来ていたように、素早くキヨウはブリッツの左腕の爪を掴み上げた。

否、キヨウはこの状況を予想していたのだ。

パワーなら俺が上だ。

こうやって両腕を封じられたら、何も出来ねエだろう……？

これが“プランB”

ブリッツをあぶり出し、その上で動きを力づくで拘束するという、キヨウは大胆な行動に出たのだ。

チャンスを待つぐらいなら、力で決じ開けてやる。

キョウの表情は、獲物を捕まえた猛禽類のような、凶暴な笑みを携えていた。

「今だフィーネ！」

ありったけブチ込んでやれッ!!」

「は、はいッ!!」

反撃の狼煙は、放たれた。

フィーネは素早く、モーゼル・ミリタリー特有の形状をした固定弾倉を二つガンベルトから取り出し、ブリッツの頭上目掛け空高く放り投げた。

「行きますッ！」

そして両手のモーゼルを持ち直し、ブリッツを撃ちながら走り出す。

走りながら発砲しては照準が定まらないが、相手は二メートル超の体躯を誇るブリッツだ。その上、完全にキョウに貼り付けにされている。急所は外しても、的自体は外れない。

弾切れを起こすまでブリッツの全身を乱射しつつ、やがてフィーネはブリッツの電流が届かないギリギリの近距離まで肉迫する。そして弾切れとなった二挺のモーゼルをブリッツの頭部へ突きつけた。

その瞬間――

——ガシャン！

先ほど投げた固定弾倉が、モーゼルに吸い込まれるようにマガジンハウジングの中へ落下、装填された。そして指先でモーゼルを回して固定弾倉のピンを弾く。最後に、華麗なガンアクションの締め

に、モーゼルを水平に重ね合わせるように構え直した。

速射に対応した構え、目の前には木偶の坊同然のブリッツの頭。

二挺のモーゼル・ミリタリーが、吼えた。

「やあああああ！！！！」

——ダダダダダ！！

弾丸の暴風 ハニカムファイア

引き金を弾く指が、加速する。ほぼ零に近い近距離で、弾丸がブリッツの頭部に殺到する。

モーゼルは現代のハンドガンと比較しても、撃ち出される初速は著しく速い。よって、その威力はマグナム弾にも匹敵する。それら一発一発が、ブリッツの弱点の頭部を貫き続けるのだ。

よって、いくら電流の防壁があろうとも——

「ギシャア！？」

——簡単に破れてしまう。

ダメージが蓄積しブリッツは苦しみによりめくと、軀に流れる電

流が瞬く間に消え失せた。

もう邪魔な電流は無い。

キヨウの瞳に、獰猛な光が宿る。

「グレイトだ、フィーネ。

後は俺に——」

キヨウは腕を包む炎を一旦消し、ブリッツの左腕を抑えていた右手を離すと、ブリッツの顔面を掴み上げた。

——メキメキメキ……！

「ギシャアアア！？」

キヨウの掴んだ右手に力が入り、ブリッツの頭部を強烈に圧迫する。たちまち骨格は軋み、ブリッツが苦悶の悲鳴を上げる。

ブリッツの悲鳴に驚いたフィーネは、咄嗟にバックステップして距離を取った。

今からキヨウの反攻が始まる。このまま近くにいたら自分も危ない、フィーネは本能的に感じ取ったのだ。

「——任せなア！！」

果たして、その判断は正解だった。

キヨウはブリッツの顔を掴んだまま、強引に地面に叩きつけたのだ。岩石が壊れたような破碎音が耳をつんざき、アスファルトが深く抉り返される。

あのままキヨウの近くで呆けていたら、飛び散るアスファルトの欠片がフィーネを襲っていただろう。

「ふっ、はっ、オラア!!」

更に何度も何度も、続けざまにブリッツを叩きつける。叩く度に鈍い激音を立て、アスファルトの亀裂が深くなる。

最後により一層力を込めて、投げつけるように地面に力強く叩きつけた。ブリッツの重量級の躯がバウンドし、中空に跳ね上がる。そして弓を引くように左腕の脇を締め――

「――はア!!」

浮いたブリッツが落ちてくるタイミングを見計らい、左ストレートを撃ち込んだ。

力任せに振り抜いた拳はモロに胴体を捉え、低く真っ直ぐブリッツは吹き飛ぶ。

更に息つく暇なく、すかさずキヨウは追走する。その速さも尋常ではなく、僅か一瞬で低空に吹き飛ぶブリッツに追い付いた。

「捕まえたぜ」

ブリッツの右足を掴み取り、自分の方へ引き寄せつつ、上空へ蹴り上げる。

背中を蹴られたブリッツは海老反りの格好で舞い上がり、キョウは跳躍してそれを追う。

住宅街を飛び越える程高く跳び、再びブリッツの顔面を右手で掴んだ。

「そろそろ終幕といきますか……」

同時に掴んだ右手だけに炎を纏わせる。忽ち超高温の炎はブリッツの顔面を蝕み、硬質の皮膚を焼く。

そして両者は重力に引かれ、流星の如く凄まじい勢いで落下を始める。

顔面を驚掴みにされているので、ブリッツは悲鳴を上げる事も許されない。今ブリッツが出来る事は、手足を無様に振り回して、逃れられない万有引力に身を委ねる事だけだ。

黒いアスファルトが視界に迫り、キョウは右手により一層力を込めた。

「沈んじまいなア!!」

そのまま渾身の力で、ブリッツを地面に叩きつけた。

火山が噴火したかのような号音が轟き、舗装された辺り一帯のアスファルトを粉々に抉り起こす。

その破壊的な一撃は、濃霧の住宅街を震撼させた。

その一部始終を、一時も目を離さず睨むようにフィーネは見つめていた。

「悪魔……」

その言葉の意味を噛みしめるように、ポツリと呟く。

スケアクロウのような下級悪魔よりも強い中級悪魔のブリッツが、“お手玉”にされている光景が、未だに信じられない。だが、幾つも穿たれたアスファルトの穴と、キョウの足元に倒れ伏すブリッツが、現実を起こった事なのだと訴え掛けてくる。

この男は危険だ——フィーネは自然と、モーゼルを強く握り締めていた。

「ハッ、まだミディアムレアなんだがな」

仰向けに横たわるブリッツの腹に、見下すように右足を乗せるキョウ。

ブリッツの顔面は見るも無惨に黒ずみ、所々皮膚の内側の肉が見えるというB級スプラッタ映画のような有り様だ。

ブリッツは、完全に沈黙した。

「……ん？」

ふと、キヨウはブリッツに乗せた右足に違和感を覚えた。
蚊にでも刺されたような、微弱的な刺激を感じたのだ。

それも束の間、突如ブリッツの軀に——“赤い”電流が迸った。

「マジか……!？」

油断した。

キヨウは驚く暇もなく、咄嗟に足を離し距離を取ろうとする。
だが、勝利を確信して反応が遅れた事が仇となった。

「ギシャアアアア!!!」

ブリッツの息が、吹き返した。

焼けただれた口から雄叫びを上げ、電流の含んだ衝撃波が全身から放たれた。

「クッ……!!」

至近距離にいたキヨウは防御も間に合わず、後方に強く吹き飛ばされる。

ブリッツはキヨウの猛攻を受けている間も、沈黙している間も、狡猾にも着々と充電をしていたのだ。

キヨウは空中で受け身を取り、難なく着地する。だがキヨウの口

端には、血が滲んでいた。

「タフな野郎だぜ」

拳で血を拭い、好戦的な笑みを浮かべるキョウ。

視線の先には、ゆつくりとブリッツが起き上がる。見るに耐えない程に醜悪な顔面から獐猛な牙をギラちかせ、全身から溢れ出る深紅の電流は、未だ衰えぬ闘気を体現している。

死ぬ前に、せめて一撃ブチ込んでやる——視力を持たないブリッツの瞳は、不退転の覚悟に満ちていた。

「ガッツある奴は嫌いじゃねえ。

いいぜ、最後はお互いマジで行こうぜ」

全力には、此方も全力で応じるのが礼儀だ。

悪魔であるブリッツにどこか共感してしまう自分に苦笑しつつ、キョウは自然体に構えた。

ボクサー染みたファイティングポーズなど必要無い。変に構えないからこそ、あらゆる状況に柔軟に対処できる。なにより、これが一番馴染む。

暫しの間、隙を探るように互いに睨み合いが続く。

フィーネが固唾の飲んで見守る中、最初に仕掛けたのは——ブリッツ。

軀を一筋の電流へと変え、深紅の稲妻がキョウの周りを駆け巡る。先程よりもその速度は速く、大量に漏れ出す電流はハウスダストのように空気中に飛散し、肌を鋭く刺激する。

それほどまでに、死に損なったブリッツの足掻きは凄まじい。なにせ、自らの命を削るほど大量の電流を纏っているのだから。

やがて、ブリッツは姿を現す。

キョウの正面から右腕を振り被り、飛び掛かる。キョウも右拳を引き絞り、迎え撃つ。

——バチィ!!

炎拳と電爪が激突し、辺りに火花と静電気が弾け飛ぶ。

接触したのも束の間、直ぐにお互いの得物を引っ込めて——激しい乱打戦を開始した。

目にも止まらぬ拳と爪の応酬。矢継ぎ早に火花と静電気が弾け合い、加速する。

そして戦いは、文字通り“電撃戦”へシフトする。

ブリッツは軀を稲妻に変えての超高速移動が出来る特性を生かし、キョウの背後から、側面から、上空から、息つく暇も与えず連続的に攻撃を開始する。

それでも、キョウは遅れをとる事は無い。

音速の域で襲い掛かるブリッツを、キョウの尋常ならざる反応速度がブリッツを捉え、難なく攻撃を弾いていく。

更に——

「パターンは読めたぜ——ビンゴッ！」

——ブリッツが姿を現すポイントを正確に予測し、先回りをしてみせた。

更に驚くことに、先程からキョウは“攻撃を繰り出す瞬間にのみ”、炎を展開しているのだ。恐らく本人は無意識だろうが、今まで常に炎を纏わせていたキョウが、今は要所要所に必要なだけ炎を用いている。

ブリッツの動きを短時間で看破する、高い状況適応能力。そして非凡な戦闘能力。

今この瞬間にも——キョウは戦いを重ねる度に、強くなっているのだ。

「ハハッ！」

キョウは笑っていた。

これが笑えずにいられるか。極限の緊張の中で繰り広げる、凄絶なドッグファイト。それがこんなにも愉しいものだったとは。

互いの意地と意地のぶつかり合い。どちらかが膝を着かない限り終わらない。

だが永遠に続くかと思われた攻防は、突如終わりを告げる。

「……消えた……？」

稲妻となつて駆けていたブリッツが、突然消えたのだ。

比喩ではない。荒々しい紅い電流も、剥き出しの殺気も、まるで最初から存在していなかったような錯覚を覚える。

憤怒に満ちたブリッツが逃げたとは考え難い。キヨウは冷静に辺りを見回し、気配を探る。

一方、傍観に徹していたフィーネだが、この事態に対して別の思惑が頭をよぎった。

（高速移動中に、消える……？

前に私が戦った時には、そんな事は無かった……）

何故フィーネが、ブリッツの弱点まで知っていたのか？

それは交戦経験がある事に他ならない。そんな彼女でも、今回のそれは前例に含まれていないというのだ。

何が起こるか分からない。フィーネも嚴重に警戒する。

その時――

――バチッ……

「「ッ!？」」

二人は息を呑んだ。

微弱な電気の破裂音。静寂に張り詰めた空気だった為、それは確かに二人の耳に届いた。

慌ててキヨウは周囲を見渡す。だが何処にも、紅い電流は見受け

られない。

——しかしフィーネには、それははっきりと見えていた。

「足元！ 真下ですッ！！」

「なに……！？」

“灯台もと暗し”ということわざは、今この時を指すのではないだろうか？

キヨウの足元の地面、確かにそこに、微弱な紅い電流が走ったのだから。

何故気付けなかった？当然だ。周囲を見回していたのなら、足元に視界が届く筈がない。

ブリッツの特性は、軀を稲妻に変える事。つまり電気そのものに变化できる。

そして電気という物質は、“サイズに囚われる事は無い”。例えば、人間が視認出来ない程に小さく出来る事も可能だ。

そう、まるで今のよう……

「クソが……！！！」

回避すら間に合わない。完全に反応が遅れてしまった。

奇しくも、その様子はブリッツが復活した際のもものと酷似していた。

「ギシャアアアア!!!!」

耳をつんざく電撃音が響き、姿を現すと同時に、紅い稲妻の衝撃波がキョウを貫く。

威力も先の衝撃波の比ではない。もろに直撃したキョウは大きく後方に吹き飛び、受け身も取れず地面に強く叩きつけられる。

「が……は……!?!」

食道を逆流し、大量の血が口から溢れ出る。内臓が傷ついた激痛に耐えながら、追撃に備えすぐに起き上がろうとする。

その時、キョウは思わず目を見張った。

ブリッツが、猛然と此方に突っ込んで来る。それもきりもみ回転しながら、さながらドリルの如く迫って来るのだ。

速い。未だ地面に尻を着いているキョウに、回避は不可能。

螺旋する電爪が眼前まで迫ると大きく開き——キョウを掴み上げた。更にブリッツは頭上に掲げるように持ち上げる。

そして——

「ギシャアアアアア!!!!」

——掴んだ両手から、紅い稲妻の奔流が放たれた。

「ぐ……ああ……が……ッ！！？」

悲鳴にならない悲鳴が、キヨウから溢れる。

稲妻の奔流はキヨウの身体を飲み込む程に太く、容赦なく蹂躪していく。掴まれている為、脱出もままならない。強烈すぎる電流が身体の神経を蝕み、力が入らない。

「くッ……！」

フィーネは迷う。

今キヨウを助けられるのは、自分だけだ。

だが、キヨウは悪魔。人に害なす悪魔に手を差し伸べる必要が何処にある？

（私は……）

モーゼルを持つ手が震える。

キヨウが死んだ所で、この世から悪魔が一匹消えるだけだ。大した問題ではない。

——だが、本当にそれでいいのか？

下級悪魔の大群の殲滅は、キヨウが現れなければ成し得なかった。ブリッツとの戦闘中、キヨウが自分を突き飛ばしていなければ、奴の爪の餌食になっていた。

彼が悪魔だろうが、恩人である事に変わりはない。

今、見殺しにしたら“悪魔”なのは一体どちらだ——？

「私は……！！」

フィーネの碧い双眸に、もう迷いは無い。

両手にモーゼルを持ったまま、腰のガンベルトから固定弾倉を弾き出し、装填する。

これが最後の弾丸——無防備なブリッツに向け、モーゼルを水平に交差させて構える。

「やああああ！！」

撃つ。撃つ。撃つ。

弾丸を全て吐き出すまで、銃爪を弾き続ける。

マズルフラッシュが瞬く度に、弾丸はブリッツを貫いていく。しかしブリッツは怯む事なく、稲妻を吐き出し続ける。

それでもフィーネは諦めない。

絶対に助ける。礼も言えないまま、死なれては困る——！

——カチッ……

だが、無情にもモーゼルは弾切れに陥ってしまった。まだ、ブリッツを止めていないというのに。

「そんな……!？」

替えの弾倉も尽きた。フィーネは尚も銃爪を弾き続けるが、撃鉄が力無く空回りする音が聞こえるだけ。

万策尽きた——フィーネは糸の切れた人形のように、その場に崩れてしまう。

フィーネは知っている。対象を掴み上げ、稲妻を浴びせる攻撃——この放電攻撃は、“対象が息絶えるまで”続く事を。

今、この時もキョウは苦しんでいる。彼の断末魔が、フィーネの胸を締め付ける。

「ごめん……なさい……」

肩を震わせ、絞り出すように呟く。

俯いているせいで、その表情は前髪で隠れている。だが嗚咽を含んだ声色が、全てを物語っている。

許せなかった。自分の無力さが。

許せなかった。自分の不甲斐なさ。

許せなかった。結局、自分は“誰も守れない”じゃないか、と……

フィーネの頬に一筋の雫が滴り——静かに、地面に墜ちた。

「——シンデレラを泣かせるなんて、イケナイ色男ね」

女の声。

囁くようなその声は、しかし不思議とよく響いて聞こえた。

——それも、フィーネの背後から。

知っている。

妖しく、艶めかしいこの声の主を、私は知っている——！

フィーネは弾かれるように、勢いよく後ろへ振り返った。

そこにいた人物は——

「レディさんッ！！」

短く外にハネた黒髪、サングラスの奥に輝くオツドアイ。肌に直接羽織った白いスーツとホットパンツが印象的な女性。

キョウが昼間に偶然見かけた悪魔狩人、デビルハンターレディが立っていた。

「ハアイ、フィーネ。

酷い顔ね、まだ12時の鐘は鳴っていないわよ？」

不敵に口角を吊り上げて、軽いジョークを言い放つレディ。

この人はいつもこうだ。常に不敵な笑みを崩さずに、軽いジョークを交えながら、どんな状況でも突破してきた。フィーネは思わず母親を見つけた幼子のように頬が緩む。

そして気付く、レディの腕には、鋼鉄色に輝く無骨な多目的ランチャー——【カーリーナ・アン】が構えられてい事を。

レディは放電を続けるブリッツを、そして稲妻を受け続けるキョウを見据え、カーリーナ・アンの銃爪に指を掛けた。

「まだ物語は始まったばかり。^{ダンス}

貴方も付き合ってもらわよ、^{ロマオ}色男」

流石レディの姉御！颯爽とピンチに現れて良いとこどり、そこにシビレる憧れるウー！！

はい、すいませんw

いやー、調子乗って書いたらこんな長さになっちゃいました（笑）
たかがブリッツ、ネロでもダンテでも瞬殺出来るのに、私が書くといくらでもw

しかしまあブラックラ○ーンを読みすぎたせいでしょうか、レディの台詞が……（汗）

“色男”^{ロメオ}はパクっ……参考にしましたが、“シンデレラ”とか“12時の鐘”のくだりはオリジナルですからねえ……。

いやー、我ながら厨二ですねー（爆）

まあこの作品のレディは、けっこうメインに近いキャラです。なのでこれからもちよくちよく出ますし、恐らく原作キャラの中では一番働いてくれるんじゃないかな（爆）

相変わらず更新も遅いし不定期ですが、物語はより一層加速します！
そろそろ“霧”の話題にも触れたいですし。

では、気軽にご意見ご感想受け付けています！

オラに元気を分けてくれ（爆）

それではノシ

「……なんでさ」

キヨウは疲れたように、盛大に溜め息を吐いた。

今自分が陥っている状況が、全く以て理解が出来ない。

ひとまず軽く深呼吸してみる。オーケイ大分落ち着いた。

物事を一つずつ整理してみよう。

自分はブリッツと戦っていて、ヘマをしてブリッツに捕まり盛大な電撃のシャワーを浴びて……今に至る。

そう、気が付けば何故か自分はベッドで寝ていたのだ。

辺りを見回せば、広々とした部屋に、大理石の床、壁やテーブル等に豪華絢爛な意匠がこれでもかと盛り込まれている。

世界でも有数な、東京の五つ星ランクの高級ホテルだ。窓から覗く夜景は、眠らない街東京の街頭やらネオンやらが眩しく輝いている

何故、自分はこんな高級ホテルに？

いや、今はそんな事は些細な問題だ。

それよりも――

「Good morning 色男。」

生憎、今は夜だけねど」

スツールに腰掛けウイスキーの入ったグラスを片手に持つ女性――レディが、ニヤニヤした顔で此方を見つめている事が、よほど問題だった。

キヨウは直感した。

面倒くせえ事になったぜ……――

レディと名乗るオッドアイの女性の話によれば、こういう事らしい。

デビルハンター

レディとフィーネは“悪魔狩人”という、悪魔を殺す事を生業とした家業を営んでいる。日本には仕事で来たとのこと。

そして昼間、惨殺現場に野次馬に紛れて訪れた際に、キヨウの姿を捉えた。

キヨウを見た瞬間、一言で言えば“違和感”を感じ、尾行を始める。

キヨウが図書館から出てきて尾行を再開するが、キヨウは人間離れした速さで屋根伝いに移動を始めた。

見失わないよう後をつけると、ブリッツと交戦しているキヨウ、そして部下のフィーネを見つける。

そしてブリッツを《カリナ・アン》で撃ち殺し――今に至る。

「あんだ、フィーネの上司だったのか」

「というより、娘みたいなものね。」

あの子、色々気が利いて凄くいい子なのよ」

「へえ……虫も殺せなさそうな顔して、ナイフで悪魔を刻んで回る姿からは想像出来ねえな」

「あら、手厳しいわね」

クスクスと笑い、グラスのウィスキーを煽るレディ。

レディの傍らのテーブルには、バーボン・ウィスキー《WILD TURKEY》が瓶の半分まで減っている。度数50%を誇る蒸留酒をジューズ感覚で飲むレディの頬は、僅かに赤みがかった。更に言えば、今レディはいつもの白いスーツ姿ではなく、バスローブ一枚という出で立ちだ。

風呂上がりなのか、ショートの黒髪は僅かに湿っていて、シャンプーの匂いが鼻孔をくすぐる。

そしてタチの悪いことに、わざとらしくはだけたバスローブの胸元からは自慢の巨乳が顔を覗かせるどころか上半分は完全に出掛かっていて、上品に組んだ足は太ももの付け根まで丸見えという始末。しかしレッドゾーンまで露出はしていない。それが余計に彼女の妖艶で危険な大人の魅力を前面に押し出している。というか、完全に誘ってるだろ。

並みの男では「色っぽすぎて狂っちまいそうだ!!」と声を揃えて悶え苦しむ事だろう。

実際、キヨウは普通に話してはいるが、視線は明後日の方向へ向いている。目のやり場に困るぜ。

とりあえず、キヨウはレディの話の中で一つ気になった点を訊いてみた。

「……で、何で俺が普通の人間じゃないって分かったんだ？
ただ違和感を感じたってワケじゃないんだろ？」

サイキック・パワー
「超能力」

即答。それも後ろめたさの感じない荒唐無稽な返事に、キョウの表情が怪訝に歪んだ。

「冗談よ。

でも本当に、ただ違和感を感じただけよ？
経験に裏付けされた、乙女の勘よ♪」

「なあにが乙女だ。完全に誘ってるみてえな恰好しやがつて」

「照れてるの？ フッフ、まだまだ坊やね」

「うるせエ」

本日二発目の盛大な溜め息を吐くキョウ。

相変わらずレディはクスクス笑いながらウイスキーを口に運んでいる。

どうもこういう手合いは苦手だ。男ならブツ飛ばして終わりなんだが、女相手にはそういう訳にもいかない。それも命の恩人とあれば尚更だ。

突如発生した謎の霧、霧と共に現れる異形共の無差別殺戮、悪魔狩人を名乗る得体の知れない人間——そして、自身に宿る謎の力。

(いよいよキナ臭くなってきやがった……)

謎が謎を呼ぶ、とでも言うのだろうか。

少しパズルのピースが増えたところで、漠然としたそれらでは全
くかみ合わない。むしろ混乱を助長するだけというものだ。

情報が圧倒的に不足している今、無闇に思考を巡らすのは得策で
はないし、キヨウ自身そんなに頭脳派という訳ではない。

唯一分かる事は、自分は目の前の専門家に協力するしかないとい
う事だった。

「……今日はもう疲れた、シャワー借りるぞ」

「どうぞご自由に」

軽い気分転換とレディから逃げる意味で、キヨウはベッドから出
る。

高級ホテルだろうが、構造的には普通のホテルとそう変わらない。
違いは豪華なインテリアがあるかどうかだ。

直ぐにキヨウはシャワールームに続くドアを見つけると、汗で若
干べたつくジャケットやシャツを脱ぎながら入っていった。

ふと、レディは疑問に思った。

「……フィーネちゃん、今どこにいるのかしら……？」

が、直ぐに納得したような表情になり、それはニヤリと意地の悪い笑みに変わる。

グラスの中のロックアイスが、カランと乾いた音を立てた。

くどいようだが、キョウという男は基本的に面倒くさがり屋である。

何故フィーネの姿が見えないのか、今の彼に言わせれば“どうでもいい”事だ。

ボーっとした眠気眼で、早くリフレッシュしたい一心の今の彼では、気が付かなかったのだろう。——僅かにシャワールームのドアから覗く、動く人影を。

そんな事はいざ知らず、ズボンのベルトを外しながら、キョウは勢いよくドアを開けた。

——そのまま、キョウは開けた体勢のまま凍りついた。

キョウの赤い双眸は、その場にいてはならない“ナニか”を映していた。

小柄で細く整ったラインは、紛うことなき女性のそれ。

雪のように白い肌に、セミロングに纏められたらプラチナブロンドの髪。それらが若干水に濡れており、悩ましくもあり艶めかしい。

「あれ……？」

そして今まさに、シャワーを終えタオルで頭を拭いていた少女——フィーネは異変に気付いた。

何気なく首を開いたドアに向けると……上半身裸のキヨウが。
キヨウ同様、フィーネも凍りつく。

しかし悲しき男の習性故か、キヨウは最初に目に飛び込んで来た
“一点”を目を逸らす事なく凝視していた。

小ぶりながらも、確かな弾力をもつ“二つのそれ”を。

時間さえも止まったかと錯覚してしまいそうな 膠着状態。

だがキヨウは徐に腕を組み、ただ一言だけ、しかしはつきりと呟
いた。

「Cだな」

なんと傍若無人な言葉だろうか。ちなみに何が“C”なのか、読
者の方には察していただける事を願う。

そしてその一言が、フィーネの意識を覚醒させるには十分だった。

わなわなと唇を震わせ、顔は羞恥にみるみるうちに赤く染まって
いき――

「きゃああああああ！！！！؟؟？」

――哀れな少女の悲鳴が、夜の都市に反響した。

——ジリリリリン！

電話のコール音が、とある一軒家の部屋に鳴り響く。

古臭いアンティーク調の電話の置かれたデスク
や、来客用のソファやテーブル等が備えられている所を鑑みるに、
何らかの事務所を兼ねているのだと伺える。

丁寧な掃除が行き届いているのだろう、綺麗に整えられた空間は
落ち着いた雰囲気を持ち、そして静かだった。

——ジリリリリン！

再びコール音が鳴る。

しかし現在、応対すべき人間が一人もいないために、受話器が
取られる事はない。

だがその時、家の奥に続くドアが開いた。

「……そういえば、キリエは今日孤児院に行くって言ってたな」

現れたのは、銀髪の青年。

黒いシャツの上にフードのついた赤いインナーを着て、濃紺のジーンズにブーツを穿いている。

背が高く、恐ろしい程に整った顔立ちは、道行く女性の十人中十人は振り返るだろう。

ただ一つ妙な点は、革のグローブを“右手だけ”にはめている事だ。まるで他人には見られたくないと言張しているかのように、ただ右手だけが不自然なのだ。

椅子を自分へ引き寄せて身を投げ出すように座り、行儀悪く組んだ両足をデスクの上に投げ出す。

その時の衝撃で受話器が弾き飛び、青年はグローブの右手でキャッチし、耳へ近づけた。

「悪いがまだ開店準備中だ」

ぶつきらばうにそれだけ受話器越しに相手へ告げると、返事を待たずに受話器を元の位置に放り投げた。

このようなだらしのない所を、“彼女”に見られでもしたら説教の一つでも飛んで来るのだが、今日はいない。

多少寂しくはあるが、独りである今が彼にとって羽を伸ばせる時間であり、気楽な一時なのだ。

「まだ店の名前も付いてねえってのに、気の早い客もいるもんだな」

呟き、欠伸をかく青年。

彼は近いうちに、便利屋を開業するのだ。依頼とあらば子猫の捜索から要人警護までこなす、何でも屋のようなものだ。

——まあ、それはあくまで“表向き”の話だが。

——キィ…ィ…

両開きの玄関ドアがこすれた音を立て、開かれる。
開いたドアから、一人の男が入って来た。

「あんたもそのクチか？」

青年は来客である男を見向きもせず、背もたれに全体重を預ける。

「シャワー借りたいってんなら勝手にしな。
トイレも裏にある」

言い捨てて、訪問してきた男に「興味ない」と言わんばかりに、デスクに置かれていた雑誌を手に取り読み始める。

“合い言葉”のある依頼が来れば、刺激の無い依頼は正直御免被りたい。まだ店の名前も決まっていけないのだから。
変なところで真面目な青年だ。

青年の不躑な対応をよそに、男は室内をゆつくりと室内を革靴の軽快な音を立てながら歩き始めた。

「君が——ネロかね。
スパイダの血族だとか」

静かに室内に響いた男の声に、青年——ネロの片眉がピクリと吊り上がる。

“スパイダの血族”。文字通り、自分にはかの伝説の魔剣士スパイダの血が流れている。尤も、自分にはその実感はないのだが。
だが、自分とスパイダの係性を知る者は、かつての教団には“もういない”。知っている人間がいるとしたら、世界で唯一人愛する彼女だけだ。少なくとも、うっかり口を滑らすなどというヘマはしていない。

この男、ただ者ではない。

男の声音は決して鎌かけではない、確信めいたものだった。

ネロは怪訝に染めた碧眼を、ゆつくりと雑誌から来訪者へ向けた。

その男を簡潔に表すなら、“黒”の一言に尽きる。

190cmはゆうに超えるであろう体軀。短い金髪に黒の鰐広帽をかぶり、要人警護のSPのような黒づくめのスーツを身に纏い、その上に羽織る鰐革の黒いコートは男が一步一步と歩く度に静かに揺れる。

英国紳士を思わせる風貌だが、スーツやコートに刻まれた皺しわからは、闘う為に鍛えられた強靱な筋肉に圧されてできたものだと分かる。

「どこでそれを聞いた？」

十分に警戒しつつネロは問うが、黒の男は構わずネロに向かって歩き続け、やがてネロの座るデスクの正面に立った。

ネロと黒の男との視線が、交差する。

男の表情はサングラスに隠れてうまく読み取れない。そのくせ心の内まで見透かされているような眼差しはく気持ちが悪い。

「君の同族から」

男は淡々と応えると、視線をネロのグローブに隠された右手に移す。

するとどうだろう、グローブと服の袖の僅かな隙間から、ボウ……と蛩のような淡い蒼色の光が溢れ出した。

声には出さなかったが、ネロは心臓が飛び上がらんばかりに驚愕した。

この蒼い光、それに呼応するように右腕が疼く感覚。この発作に似た反応を、ネロはよく知っている。この反応が起こる条件やタイミングもまた然り。

……が、今は“そんなこと”はどうでもいい。

問題は、ネロが“気付けなかった”事だ。

ネロの右腕は普通の人間のそれとは大きくかけ離れた代物であり、ネロ自身それは嫌というほど自負している。故に、ネロの右腕は“同類”のものに対して、どんな微弱なものでも半ば脊髄反射の如く先ほどのような発作が起こるのだが……

（コイツには全く反応しなかった……。

それどころか、俺の右腕に干渉して無理やり反応させてやがる……！）

右腕がなんの反応を示さないのなら、それは力を持たない普通の人間だということ。

だが、普通の人間がどうして“魔”に属するネロの右腕を操れようか……？

暫くして、右腕の疼きは収まった。

ネロは更に殺気を込めた目で、射抜くように男を睨み返した。

「君に招待状を渡したいと思ってね」

だが男はネロの静かな恫喝を全く意に介さず、右手をデスクの縁に触れ――

「是非、受け取って頂きたい」

——勢いよく右手を翻し、男はデスクを吹き飛ばした。
だが最大限の警戒を敷いていたネロは、冷静にデスクに乗せた足を翻し、零距离で迫るデスク自体を踏み台として跳躍する。

目標を外したデスクは勢いそのままに、部屋の壁に激突して停止した。

ひっくり返ったデスク

にネロは着地すると同時に、腰のホルスターから自作の回転式拳銃リボルバー《ブルーローズ》を抜き、男のいる前方へ銃口を向けた。

しかし、男はいなかった。デスクを翻した一瞬の内に、最初から存在いなかったように忽然と姿が消えていた。

逃げられたか……。ネロは忌々しげに舌打ちしてデスクから飛び降りて、ブルーローズを握っていないグローブの右手を頭上へ向けた。

「招待状ね……」

開いた右手に何かが落ち、それを掴む感触。ネロは右手を顔の前に戻して掴んだものを確かめる。

それは一枚の紙だった。この紙が先の男が口にした“招待状”なのだろう。

その紙は滑らかな英語で、“Japan”と“by Jack the ripper”とだけ書かれていた。

「切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）……？
最後までふざけた野郎だ」

くしゃりと紙を握り潰す。中世の猟奇殺人鬼を名乗るとは、いよいよキナ臭くなってきた。

「いいぜ……。この茶番、乗ってやるよ」

しかしここまでお膳立てされて黙っていられるほど、ネロは大人ではない。

自分はスパイダの血族だと知っている者を捨て置けない。何より、売られた喧嘩は買う主義だ。ここまでコケにされて水に流せるほど、俺は器用じゃないんでな……！

静寂が戻った部屋にただ一人、ネロは獣の如く癡猛な、しかし年相応の無邪気で好戦的な笑みを浮かべていた。

「まったく、人使いの荒いやつだ」

とある空港、その待合室。その席の一つにどっかりと腰を降ろした男がため息とともにぼやいた。

筋骨隆々とした体格には黒のインナー、その上に羽織るは血のように赤い深紅色のラバーコート。派手すぎる服飾とは対照的な、銀の髪。

顔には浅い皺、顎には無精髭が無造作に生えている所を見ると、男の歳は30代半ばだろうと容易に窺える。

風格は威厳に満ち溢れ、しかし飄々とした幼さも併せ持ち、まるで宇宙のように掴みどころがない。それ故に大人の貫禄と、女性のそれとは趣の異なる色香を、銀髪の男は纏っていた。いぶし銀、というやつだろう。

銀髪の男は手に持っていたアタッシュケースを乱暴に傍らの席に置き、大きなギターケースを立て掛ける。奇抜な風貌と相まって、空港内を行き交う人々には、彼は渋いパンクロッカーに見えていることだろう。

「けど仕方ねえか、少しでも借金をチャラにしてえしな」

背もたれに深く腰を預けて、銀髪の男は苦笑する。

「あのレディが“でかい仕事”だって言っただけなら、退屈しのぎにウェルカム・フジヤマといくか」

空港の天井を仰いで、今度は不敵に口を吊り上げた。
希しくも、その銀髪の男の獰猛な笑みは、先のネロの笑みと酷似していた。

「来たれ、反逆の血統よ」

時刻は夕刻。空は燃え上がるように彩り、《城塞都市フォルトウナ》の街並みを緋色に染める。

その住宅街の内の、一つの一軒家の屋上に黒服の男——ジャック・ザ・リッパーは佇んでいた。傾く西日が、彼の黒服を怪しく照らす。

まるで映画の語り手のような口調で、彼は言葉を刻んでゆく。

「間もなくカーテンコールの時間だ」

サングラスに隠された

視線は、キャリーバックを引いて街道を歩くネ口を捉えている。ジヤック・ザ・リップパーは別にどうこうしようという風でもなく、ただ眼下の青年を見下ろすだけ。その表情は淡泊なもので、何の感情も窺い得ない。

「だが生憎、ステージ“我ら”の舞台は飛び入り参加を是としない」
イレギュラー

ジャック・ザ・リップパーは黒い鰐革コートの懷に手を伸ばし、二枚の写真を取り出す。

その二枚には、茶髪の青年と金髪の少女——キョウとフィーネが移っていた。

それを見たジャック・ザ・リップパーは空虚な無表情から一変、口角を凶暴な蛇のように鋭く吊り上げた。

「烏合芸五の果てに名優の奮戦は茶毘に伏す。
招かれざるゲストは退場とさせていただく。」

プレリユード
開幕の序曲を奏でるのは、それからでも遅くはあるまい」

写真を持っていない空いた手で、ジャック・ザ・リップパーは全身を隠すようにコートを翻す。

すると突然オペラ座の怪人よろしく、なんの痕跡も残さず姿が消え失せた。

東の果ての地に多くの“魔”が、集結しつつある。

災厄の予兆か、混沌の再来か。舞台の幕が上がるまで、それは誰にも知り得ない。

さあ、格調高いクラシックの時間は終わりとしよう。

さあ、奏でよう。骨太のロックンロールを。

さあ、始めよう。むせかえるような血と硝煙のメタルを。

さあ、愉しもう……

——更新遅れてサーセンしたアアアア！！（エアトリック土下座）

言い訳としては、ちよいと『ソードアートオンライン』を読んで……（汗）

ああいうゲームやりたいッス。剣道二段（笑）の実力をいかになく発揮して人間もモンスターもスタイリッシュにバツバツバツ殺（ry

……すいません、話が逸れましたね。

今回はちよつとした閑話でしたね、プロローグを区切る意味で。さりげに新キャラだして伏線も張るなんて、汚いさすがスノーマン汚い（爆）

空港での“銀髪の男”は……まあ説明するまでもないですな。

さて、『ジャック・ザ・リッパー』も表舞台に立ち、物語は序章に突入します。まあ更新は相変わらず不定期ですが（汗）

溜めていた他作者様の作品もそろそろ見たいし……。

それでは（＾o＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2261t/>

Devil May Cry -Keep yourself alive-

2011年11月24日18時46分発行